
かみ × かみ！

久留間水樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かみ×かみ！

【Nコード】

N5348X

【作者名】

久留間水樹

【あらすじ】

ゴミ捨てばに落ちていた美少女は、自称ギリシヤン神話の戦いの神、アテナだった！不思議家系を持つ主人公浅葱や、ヒロイン溺愛の無二の親友アルテミスなどが出てきます。

第一章 戦いは女神とともに舞い降り、散る その1

* * *

彼女を助けるためなら、私は何だってする。

そのせいで、あの子が泣いてしまふのだとしても、それでも、私は――

思考がぴたり、ととまった。

否、とめざるを得なくなった。

「……………きたわね」

地を蹴る。跳躍し、この人間の作る高層ビルというものの壁を垂直に駆け出した。

下でわーわー騒いでいるような気がするが、気のせいだろう。

見つかるわけにはいかない。

たとえ見つかったとしても、あいつに見つかる前に、目撃者を殺さなければならぬ。

タンツ、ともう一度壁をけり、向かい側の高層ビルに移った。

（……………足がつきたくはなかったけど）

転移の魔術を使おう。

神気を察知し、追いついてしまうかもしれないが、それより先に逃げれば良い。さすがにとんだ場所を探るだけの能力はもっていないだろう。

でも、行き先をどうするべきか。

（神殿は絶対もう見張られてるだろうし、私に関連するところは無理ね。どうしましょう）

そのときだった。

「見つけたぞ——!!」

「っ、やばっ!!」

即座に魔術を発動させる。行き先などもうどうでも良い。

「て、転移——っ!!」

私の姿が掻き消えるのと、あいつらが来るのはほとんど同時だった。

くそ、という声が聞こえたような気がした。

そして、舞い降りた地は——

* * *

第一章 戦いは女神とともに舞い降り、散る

幼いころからの習慣というものはなかなか抜けないものだ。

と高校一年生、鹿島浅葱は思う。

その習慣のひとつに毎朝決まった時間に必ずゴミ捨てをするというものがある。

この習慣は二年前に死んだ大好きな姉が病弱だったため、なにか出来ることはないかと幼い自分が必死で考えた末に、出来るだけ家の空気をきれいにすることを思いつき、ならばと率先してやり始めた家の手伝いのひとつだ。ついでに家の掃除も率先してやった。断じてススコンではない。姉思いの弟だったのだ。良く出来ていた弟だったのだ。

「しっかし暑いなあ」

まだ春だというのに、半そででジャージというラフな格好でも汗が出てきた。

つつかけを履き、ドアをあける。ゴミ袋を手に持ち、そのゴミ袋のせいで見えない足元にびびりつつ、階段を降りていった。

マンションの玄関の横にあるゴミ捨て場。
その右端の奥が浅葱の定置位置――。

「・・・・・・・・・・は？」

先客がいた。

捨てるほうではなく、捨てられるほうの。

それは長い綺麗な髪をしていて、どこかの民族衣装を着ていて、
槍を持っていて、閉じられたまぶたがあつて、割とと整った顔を
してて。

一言で言えば女の子だった。

それも、美少女とよべるほどの。

年齢は浅葱と同じくらい――十六、十七程度だろう。

そんな子が、ゴミ捨て場で倒れていた。

「・・・・・・・・・・は、あ？」

ワケが分からない。

なぜか武装をしているし、どこかの民族衣装？をつけ槍を持って
いるせいなのか、それとも単にこれほどまでの美少女を見たことが
無いからか。

浅葱は、そこから一步も動けず、その子を見ていた。

「ん・・・・・・・・・・」

ピクツ・・・・・・・・・・、と女の子が体を震わせた。同時に、大きな
瞳が小さく開かれる。

のそり、と身を起こし、ぱちぱちと俺の方を見ながら瞬きをした。

（・・・・・・・・・・、可愛い・・・・・・・・・・）

不覚にもそう思ってしまった。

寝ている時も十分可愛かったが、大きな瞳が開かれると可愛さが
百二十パーセントくらい増量する。その瞳は海のように青く、それ
を見た瞬間、浅葱はこいつが人間ではないと本能で悟った。

そして、こいつにかかわるとろくなことが起こらないということ
も。

今なら引き返せる。

まだこの少女にとって広人はたまたま目の前にいたやつというだけだし、真っ赤な他人だ。

だけど、なぜか躊躇してしまふ。
どうしてだろう。

この少女の美貌に保護欲を刺激させるものがあるのだろうか。
それとも……。

「ねえ、その人間」

その躊躇の間に少女は目をはっきり覚ましたようで、とんでもなく失礼な一言を浴びせてきた。

「なっ！失礼なヤツだな……。人を人間呼ばわりかよ……」

「人間は人間でしょ。それとも鉄の種族と呼んだほうがよかったかな？」

「鉄……の種族？」

浅葱の問いには答えず、少女は盛大にため息をついた。

ついで、不可解な質問も投げかける。

「ここはなんという国？」

「……なに、いつてんだ？」

記憶喪失か？こいつ。

はたまた変人か。

「なんという国って聞いてるんだけど」

なぜかこいつは一回答えなかっただけでたいそうご立腹のようだ。答えるのが当然だこの豚が、みたいな顔をしている。まるっきり人を見下しているような気がするのは自分だけだろうか？

「なにつて……日本、だけど」

とりあえず、浅葱は少女の問いに答えてみる。

「日本？……もしかしてあのちっぽけな島国？」

当の本人はそれを聞いてしばし考え込み、ああ、と納得した顔で周りを見渡す。

迷子とは違うようだ。

「ちつぽけとは失敬な。ちゃんとした発展国だぞ」

浅葱は別に自分の国が特別好きではないのだが、なんとなくよそ者にいわれるとむかついた。

「だまりなさい。こんな小さい国なんて島と表記したほうがいいんじゃないの？」

はんつと鼻で笑う少女。

思いつきで見下している。

姿に似合わずプライドだけは高そうだなあ、と浅葱はのんびりおもった。

ため息をついて、会話を続けてみる。

「じゃあ日本より小さい陸の国はなんと言えればいいんだよ」

「・・・・・・山？」

きよと、と首を傾げつつ少女はいった。

「いやいやいや。なんつーかお前の地理感覚破滅的だな」

少女のとんちんかんな答えに浅葱は苦笑した。

それが気に食わなかったのか少女は、

「あなたの数学も破滅的」

「なっなんで知って・・・・・・」

うるたえる浅葱をじいーっと見つめた後、

「当たってたの？というより数学ってなによ？」

「そんなことも知らんのかい！お前何人だよ！」

「人じゃないわ。神よ」

平然といったのける少女に、浅葱は

「そーだな！お前の精神もはや神！」

と、いいのける。しかし

「しかしなんというか小さい国よね・・・・・・」

完璧スルーだった。

「スルーなのか！？スルーなんだな！・・・・・・ならなんできたんだよ」

そんな漫才のようなことを言い終えたあと、

「……………うーん。座標を指定する時間がなかったの」

浅葱の耳に届いた一つの言葉は、

「座標？何の座標だよ」

とてもとても……………不可解だった。

「決まってるでしょ？」転移“の魔術。しょうがないじゃない」

テンイノマジユツ？

言われた意味が分からなかった。

マジユツ……………ってあれか？ゲームでよくある回復魔法と同列の？表記でいう魔術か？魔女とか魔法使いが使う、あの……………？

しばらくフリーズしていたらしい。

ピッピッピッというアラーム音が左手首に付けていた時計から鳴り、正気に戻った。

「あ……………？」

AM 7・・30。

学校に行く時間だ。

「もう、こんな時間か……………」

学校に行かなくてはならない。しかし目の前の少女をほっぽっていくのは自分の良心が許さない。

どうしたものか、と浅葱が悩んでいると、

「なっ…なによそれは！なんの魔術を展開させたらそんな音が……………？」

目の前の少女がおびえつつ未知のものを見る期待と不安をこちゃ混ぜにしたまなざしで浅葱の腕時計を指差す。

「これか？アラーム機能付きの腕時計だけ……………」

ついでによく見せてやろうとずい、と左手を突き出す。

「うわっうわっ」

少女は慌てて後ろへずりずり下がる。

触れるのをこわがっているようだ。ほんとちよっぴり、子供みたいだな、と浅葱は思った。

「……これ、知らないのか？」

「しっ、知らないわよ！私はそんなもの知らない！だから近づけるんじゃないわよそんなもの！」

両手をぶんぶん振って否定をアピール。

ついでにじりじりと後退し間合いを取っている。

「……でもなんで知らないんだ？生活必需品だろ？もしかしてめちゃくちゃ金持ちの箱入り娘なのか？」

そうだとすれば、このえらそうな態度もうなずける。おおかた、いつもメイドとか下々のやつらは世話を焼いていたので自分が一番偉いと思っているのだらう。まるで世間知らずのお嬢様だ。

しかし浅葱は忘れていた。

この少人女の瞳を見たときこいつは人間ではないと本能で悟ったことを。

そして、この少女の服装を。

少女はぶんぶんと頭を振り、違う、と前置きしてから。

「そういえば、自己紹介忘れてたわ。私は、知恵と戦争の神、アテナ。都市国家アテナイの守護神でもあるわ。象徴は盾、槍、兜、オリーブ。聖獣はフクロウ」

「神様？」

「そうよ。あなたもギリシア神話くらい読んだことがあるでしょ？」

私は有名なオリュンポス十二神の一人なの！」

「ばーん、と自作の効果音つきでない胸を張るアテナ。

あるけど……と、浅葱は口ごもった。無論、オリュンポス十二神の中に知恵と戦争の神アテナがいることは知っている。

「もしかしてさっき“人じゃない。神よ”っていったのは冗談じゃ、無い……のか？」

「当たり前じゃない。冗談をいつてどうするのよ」

「でも……」

しかしいきなりいつても信じられない。まあいきなりじゃなくても信じられないが。

「なあ、証拠を見せてくれよ」

「証拠？」

顔をしかめつつアテナは聞いた。

「ああ。お前が神だという証拠を、だ」

「……いいわ」

アテナは顔をしかめたままうなづく。

「私の母……神々のうちの最賢者である知恵の神メティスはね、大洋神オケアノスとテテュス夫妻から生まれた3000人オケアニスたちのひとりであり、自在の変身能力を持つ水の女神の一人なのよ。当然私は母様の血を引き継いでいるからね……変身は得意なんだ」

そこでアテナは言葉を切る。

意味が分からないまま浅葱は一応質問してみた。

「それで？」

「察しの悪いやつね。つまり、よ。あなたの言うものに変身して神であることを証明してやろうってこと」

「なるほど」

これには浅葱もうなづく。

確かにそんな業を繰り出されたら神だと信じるしかない。

「それで、なんに変身すればいいの？」

「えっ！えーと、えーと」突然いわれてもそう浮かばない。神にふさわしいもの……。視界の端に猫が通り過ぎた！「……。ねっ猫！」

•

•

双方沈默。

「猫・・・・・?」

「……はい、なんかすんません」

ジロリ、と冷たい輕蔑した瞳で睨みつけるアテナの氣迫に押しつぶされそうになりながら浅葱は誠意をこめて謝る。

はあ……というため息が聞こえ、

「いいわよ。ここで断つては出来ないといっているようなものだからね。んー猫か……。なにかもつと、神にふさわしいものはないの？」

「だからごめんって言うてるだろ？」

「もういい、じゃあいくわよ。目をつぶらずみてなさい」

刹那、パアアアツとアテネから光が漏れ始める。

「 ! ? 」

にゆる、とアテナの頭から猫耳が生え、お尻からしつぽが生え、手足が肉球の付いたものになり、槍が消えた。さあ、今から小さくなる——というところで

ぶお おお おお おお おお おお おお おん。

車が横を通り過ぎる。

「なっ なな なな なな なな なな なな なな なな なな !!!!!!」

アテナが“な”を叫び続ける。

多分、なんだこれは、といたいのだろう。

「車だ。特に害は与えないかな?」——って、なななななんだその格好!」

今度はこっちが”な”を繰り返す立場になった。

変身は中途半端で身体は人間、しかしところどころは猫。猫耳が生え、しっぽが生え、肉球つきになったアテナは神の威厳らしきものがすっぱり消え、世に言うところの――

「コスプレ猫耳しよう――ぶぶっ！」

「バツバカ――！！！！！」

殴られた。一切の容赦なく。

「黙れ黙れ黙れ！黙れーい！」

ドカツボコツグギャー！という軽快な音とともに羞恥のせいが真つ赤な顔で浅葱は蹴られ殴られた。あと、途中なにかが折れたような音がしたのは気のせいだろう。というか気のせいだと信じたい。

「ごっごめんなさいだからやめろ今ぐきつてあーいーっ腰っ腰が破滅的に痛いっわっこれ見よがしにそこ集中攻撃すんな馬鹿そこあざできてギャー――！」

「うるさーい！バカバカバカバカ！この大ばか者ー！どうしてくれるのよ！今の精神状態では元に戻るのとは不可能！どうしてくれるの！治せ！何でもいいからどんな手段使つてでも治せ治せ治せ――！」

もう涙目の自称カミサマ。

というよりさっきからだんだんぱわーが増してませんか？視線に殺気が混ざってきてませんか？マジ恐いんですけど………。

と、内心思つたが、どうせ口に出すとさらなる怒りが待っているのであえていわず、

「わっわかった！なら治るまでうちにいろ！なっ？だからやめてくれ！お願いだからもうまじでお願いだから………」

最後にはこっちから懇願している。自分の情けなさに浅葱は心で泣きつつ顔は平常心で叫んだ。

アテナはその（懇切な）叫びを聞いた後、

「………分かつたわよ」

涙目で足を止めた。

「ほっ………よか」

「しかしただいさせるだけなら赤子にだってできるわ。という訳で

「私はおなかですいた。なんかご飯を食べさせることをを命ず！」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

なんだかとても理不尽な自称力ミサマだった。

* * *

第一章 戦いは女神とともに舞い降り、散る その1（後書き）

感想お待ちしております！

第一章 戦いは女神とともに舞い降り、散る その2

* * *

所変って浅葱の部屋。

がつがつがつ。

そんな効果音が横から聞こえてくる。いや、まじで。

「ふむ、なかなかおいしいむぐっんぐぐがががが」

（うわ………）

せまいボロアパートに女の子（猫耳コスプレ美少女から戻った）がいるだけでときどきしてしまふ青春真っ只中の浅葱だが、それ以上で圧倒されているのは、少女の食欲だった。

「なあ、どれだけおなかすいてんだ？」

今月の食費を心配しつつ浅葱は聞いてみた。

「へたくだふいでりゅ」

「あーわかったからちゃんと飲み込んでから言え」

「むぎゅがりがりごつつつつくん。しょうがないじゃない。こっちにくるには結構神気を使うんだから」

ぺろり、手に付いた手羽先（昨日の晩御飯）のタレをなめとった。

「神気？」

「そ、神気」

当たり前のように言われても、分からないものは分からない。

「神気って、なんだ？」

「神気って言うのは……一言で言うなら命みたいなもの？ いや、厳密に言えば違うわね。無くなったところで死なないし。

あ、体力にも似てるかな。神気を使うほど、体力が削られていくの。

透明で、質量がないけど……私たちの意思で姿かたちをかえられるし、重量だって、つけられる。それに魔術を使うときにも、必要なの」

「さらりとそんな単語を使わないでほしい。思考が追いつかなくなる。」

「魔術……」

「そして神気が神の強さを決めるわ」

「へ？なんで？」

「神気をただの腕力だと考えると……たとえば二つのもの……石を落とすか岩をおとすかだったらどっちが殺傷能力が高いと思う？」

「なるほど……つまり魔術を発動するには神気が必要で、神気があるほど高度な魔術が使えるから必然的に強くなる。ってことだよな？」

「ふうん……」

「アテネは少々びっくりして目を開く。こいつ、馬鹿ではなかったらしい。」

「そ。ついでに神の格もその分量で決まってるわ。お父様が一番多いから全ての神々を統べるオリュンポス十二神のなかで一番えらいわけだし……」

「それって威厳にもかかわってるのか？」

「当たり前じゃない。お父様の威厳はすごいわよ」

「なあ、そういうば……どうしてお前はこの人間界にきたんだ？」

「……、そうねえ……興味があるからよ」

「興味？神が？人間に？」

「当たり前じゃない、人間の不思議な力に、ね」

「不思議な力……？」

「疑問におもった浅葱はアテネに聞いてみる。」

「たとえば、私がここににいるのも、人間の力」

「えっ……！？」

知らなかった事実には、浅葱は驚きの声をあげた。

「んー……説明するとちよつと長くなるけど、いい？」

アテナの確認に浅葱は

「ああ」

と答えた。この際学校とかどうでもいいのである。っていうか今から行ってもものすごい遅刻だし。

「この時空には三つの世界があるの、知ってる？」

「世界……」

浅葱はしばし考えた。

答える時間を待たず、アテナはさっさという。

「天界、ここは神々の住まう、三つの世界の中で一番神聖なところ。そして、転生を待つ魂の居場所。だからこそ、神聖でなければならぬだけだね」

魂が穢れては、ここの世界に転生ができないからだ。

「そして、もう一個は、冥界。死した者が住まい、そして、穢れを払拭するところ。さらに、罪人が罪を洗い流すところ」

「罪人……」

「人間界にもあるみたいだね、刑務所ってヤツ？もちろん人間もだけど、人外のものもそこにいつわ。そう、例えば――罪を犯した神様、とかね」

「……」

その言葉に、浅葱は黙った。

彼女の言葉にどこか皮肉が混じっていたような気がしたのだ。

どこまでも黒い、……「憎しみ」に似ているような感覚。

浅葱の様子に「どうしたの？」とアテナは声をかけた。

なんでもないと浅葱は答え、そう、とアテナはつぶやいた。

「で、最後。人間界。動物のすむところね。そして、“悪意”が一番強いところ」

「悪意？」

「そ。悪意。たくさんの怨恨が私には見える、感じる。魂がもつとも穢れやすい場所よ」

神界で魂は生まれ。

人間界で魂は穢れ。

冥界で魂は清められる。

すべてはその繰り返し。ゆがめられることはない。

「天界、人間界、冥界。三つの世界は重なり合い、循環し、そして普通ならば絶対に干渉しあえないの。だけど、今私はここにいて、そうじゃなくなつて昔から神々はこちらに来ていた。たとえば冥界への行き道はただひとつ。人間は“死”という形でしか冥界へはいけないけれど、それが唯一の方法。それだけの方法でしか、冥界へはいけないはずのよ。だけど私たち神々はいろいろ規定はあるけど、いけるし。これって結構おかしいことだとはおもわない？」

アテナの言葉に、浅葱は少し考えてみる。

「ううか、おもふのだが。」

「どうして循環しているのに、干渉しあうことはできないんだ？」

矛盾しているなあ、とおもふ。

循環していること事態が、干渉しているとおもふのだが。

「ああ、もしかして、言い表しが間違っているのかも」

そういうやいなや、アテナは両の手の小指をぴったりとくっつけ、手のひらを天井へ向けた。

そして、ぼわ、と光と闇と混濁した色合いの三つの球体が輝きながらアテナの手の平の上で舞う。

「……展開、三つの世界を表示、世界のありようを体現せよ」

アテナが厳かにつぶやくと、それらはぴたりととまり、そしてそれぞれが光の道筋をそれぞれにさす。闇の球体の一筋は光の球体へ伸び、光の球体の一筋は混濁の球体へ、混濁の球体の一筋は、闇の球体に。

「光が天界。私たち神々の住まうところ。それから、冥界からすべての罪を洗い流したものが輪廻転生を待つ場所。闇が冥界。死したもののたちが行き着くところ。混濁がこの世界。私たち神が創った者たちの、園よ」

アテナの説明になるほど、と合点した風に浅葱はうなずく。

「光から混濁にさしているのが、生まれてくるものの通り道、混濁から闇に指しているのは死したものの通り道。闇が光にさしているのは、罪を洗い流したものの通り道」

「そういうこと」

アテナは分かった？というような顔をした。

「え、だけど、でもその通り道を逆行していけば、天界のものが冥界にいくこととか、簡単じゃねえの？」

「……あなたは、絶壁の、しかも滝が物凄い勢いで落ちてくるところを、登れる？」

「……..は？」

アテナのわけの分からない質問に思わずそう返してしまう浅葱。

アテナはふう、とため息をついた。

「無理でしょう？絶対に」

「まあ、うん、無理だろうな」

アテナはパアンっと三つの球体を消し、今度は手を数センチ開けて手のひらと手のひらを体の前で合わせる格好をした。

「展開せよ、通り道を表示」

刹那、アテナの手のひらと手のひらの間に、激しい光の渦が巻き起こる。その渦は右の手のひらから左の手のひらへ流れていて、左の手のひらに当たった瞬間、まるで溶け込んだかのように消える。右手からの渦は絶え間なくながれていて、どこから生み出しているのだろうと浅葱は思い――

「あ、もしかして、それが神気？」

ふと、おもったことをたずねてみる。

対してアテナは、ぽかんとしたあと

「え、いまさら？」

と呆れたように言った。

「えーっと、これは、神気という物体を……えーっと、えーっと……」

「そのままだと見えないから、光に変換してるけどね」

浅葱が考えている間に言われてしまった。

「ま、とにかく、右が天界で左が人間界だとするわ。つまり、この光の渦は生まれてくるものの通り道ね。生まれてくるものはこの渦の流れにながされていきやすいけど、反対に、生まれてきたものは天界には戻りにくいでしょ？むしろ戻れないの。それで——」

「ちよつと待て」

アテナの説明をとりあえずさえぎって、浅葱は疑問におもったことを口にした。

「その、生まれてくるものの通り道を使えば、楽にこつちの世界にこられるんじゃないのか？」

アテナは一瞬驚いた顔をしたあと、バカね、とつぶやいた。

「それは、魂だけ。肉体はこちらで形成されているから。私たちにめちゃんと肉体はある。だから通れない……はずだったんだけどね」

「はずだった？」

「そう……」

思慮深い顔をして、アテナは浅葱を見つめた。突然のことに浅葱は顔を朱に染めていく。

「ここからが、人間の不思議なところなの。私たちは今肉体を持っ
てこちらへ来ている。魂だけならまあこちらの世界にこれなくはないけど、肉体もなく魂だけでさまよっていたら、神といえど消滅してしまう。だけど……人の“思い”が、私たちに肉体という名の魂の器をあたえる」

神はこちらの世界には魂だけしか入れない。

だけど、人間の“思念”——“創造”が彼らに器を与える。

だからこそ彼らは人間をいつくしみ、守る。

こちらの世界へ来るために。

——だけど、と浅葱は思う。

「別に、そんなこと以前に、こちらの世界にこなければいいんじゃないか？」

アテナはその言葉を聴いて、しばし考え込み、ふう、とため息をついた。

どこか、あきらめているような、そんな顔に見えた。

「神はいつだって傲慢なもの。すべてを手中におさめていなければ気がすまない。それに、好奇心は猫をも殺すとか、そんな感じの言葉があるでしょう？興味があるのよ、こちらの世界に」

「ふうん……」

アテナの答えにもう一度浅葱は考え込み、先ほど聞いたことをもう一度たずねてみた。

「アテナはどうしてこちらへきたんだ？」

その瞬間、ぴく、とアテナの体が動くのがわかった。

ほんのわずかな動揺。

そかしそれを、浅葱は見逃さなかった。

「……興味が、あったからよ」

先ほどと同じ答え。

同じ抑揚。

それを、少しの間を空け、感情を押し殺していった。

おかしい、とおもった。

こいつは、何かを隠している、と浅葱の直感が継げていた。だけど、それは聞いてはいけないような気がして。

聞いてしまえばもう二度と帰ってはこられない世界に入ってしまった気がして。

——聞けなかった。

そんな浅葱をみて、アテナは立ち上がった。

そして、にこり、と笑いながら

「じゃあね」

といった。

「は………？」

「じゃあね、っていったのよ。あなただって、迷惑でしょう？これ以上邪魔になるのは。そろそろ兵を蓄えないとね。アルテミスにあつたら面倒だし………」

当然のごとくそういいのけるアテナに、なぜか浅葱は動揺した。行くな。

そんな言葉が彼の頭をよぎる。

だけど、所詮彼女とは生きる次元が違うのだ。

引き止めても、意味はないだろう。

というか、どうして引き止めたいと思うのだろう。

思案している浅葱をアテナはいぶかしみつつ、

「あなた、名前は？」

と聞いた。

「………浅葱。鹿島浅葱」

「浅葱、ね。いい名前だわ。大切にするのよ？」

にこ、と笑ったその顔は、どこか、さびしげで。

足取りは、軽やかとは言いがたかった。

それでも、彼女はいくのだろう。

自分の目的のために。

自分の信ずる道を歩むために。

（………まぶしい、な）

「ばいばい」

「………また、な」

浅葱の部屋のドアを開け、彼女は飛び出していった。

* * *

第一章 戦いは女神とともに舞い降り、散る その3

* * *

そして、次の日。

「・・・・・・・・」

もくもくと通学路を歩く浅葱の目の前で、

「どーしたの？」

びよこん、と大きく体を揺らしてたずねる少女がいた。

「別に。それより美祐、転ぶぞ」

「転ばないもーん」

そういつて、くると美祐は浅葱の周りを歩き始めた。風が彼女のツインテールを揺らす。

「ふふん、このめんだんてー日向美祐の目はごまかせないのですぞ？」

「めんだんてーじゃなくて名探偵な。あとお前はいつから名探偵になった」

「えー、でも、浅葱のことならわりかとわかるよー3年間の付き合いだもんねー」

そう、彼女日向美祐は浅葱が一人暮らしのためアパートを借りたとき、隣の部屋だったのだ。

それから同じクラスだったり高校も同じだったりして、今までいろいろ友人関係が続いてきた。

ついでに美祐はこんな変な言動をしているくせに、やたらと頭がよく、彼女を見ていると（神様って二物どころかいらないものまで与えてるんだなあ）と実感できる。かわいいし。

「うにゃああい、ば、ばかばあかつかか、お、往来でそ、そんなに
やはずかしい質問・・・・・・・・」

若干猫化しているような気がする。

それが、アテナを思い出して、浅葱は少し憂いを帯びた目をした。
それを目ざとく気づいた美祐は、しかし何も言わず、気づかぬふ
りをして顔真つ赤にして涙目で背中をバンバンたたいた。痛くない
程度に。

「んー、まあいいや」

「よくなーい！よくなーいよくなーい、お、おおおんなの子にそ
んな質問してスルーとはどんな拷問だこらー！」

怒られた。

「拷問・・・・・・・・・・？」

「そうだよっもう、浅葱なんか知らないもんねっ。今日せつかくご
飯つくりについてやるーと思つてたのに。折角浅葱の大好きな春巻
きなのにつ」

「春巻き・・・・・・・・・・っ！！！！」

目をきらきらさせて浅葱は美祐を見つめる。

美祐の料理の腕前はそこらの星つきレストランのシェフを軽く超
える。

そこに大好物という要素をくわえると、もう、神だ。

「いや、だから作らないって——」

「サンキューな！まじでサンキュー！おおー、春巻き・・・・・・・・・・」

「

一切話を聞いてない浅葱に美祐はしょうがないなあ、と苦笑した。
何だかんだいって、二人はこれまでずっと仲良くしてきたのであ
る。

しばらく歩くと学校に着き、上靴に履き替えた。

そのとき。

「——。」

じつと、どこかを見つめている美祐。その顔はいつものぼわぼわ

としたものではなく、どこかしゅつとした、まじめなものだった。

「・・・・・・・・？み、ゆう・・・・・・・・？」

ぴく、と美祐の瞳が動く。

「・・・・・・・・っほえっ？」

「ほえ、じゃねえし。何かいるのか？」

「んーん、なんにもない」

ぶんぶん顔と顔を振った美祐ふと我に戻り——そしてにやりと笑った。

「ほおー、乙女の顔を見つめるとはー、浅葱のへんたいー」

浅葱はその発言にまっかになり、た、たまたまだよ、と否定する。

「くふふ、照れなくてもいいのに。脈ありー？」

「なわけねーだろ」

ぽかっ和美祐の頭を軽く叩く。

「いったーい」

「はいはい。いくぞ」

「むう。変態の浅葱君が流したー。のりとつつこみは大切なんだよー」

たわ言を発している美祐を無視して、とことと浅葱は進むことにした。

わーまってー、と美祐がとてとて（そう表現するのがしっくりくる）と追ってきているのだが、浅葱は流している。

浅葱は窓を見上げ、思う。

こうしている間にも、彼女——アテナは自分の道を進んでいるのだろう。

自分のように、うじうじと悩むこともなく。

あのまぶしいほどの信念と、力を持って。

* * *

第一章 戦いは女神とともに舞い降り、散る その4

* * *

その帰り道だった。

ぶーたれる美祐を置いて、先に帰った浅葱は、ふと足を止めた。

「……………」

自分のマンションの下で、眩いほどの美少女がたたずんでいたのである。

——正確には、ゴミ捨て場に。

「んー、ここじゃないのか。ここから匂いはするんだがな」

「……………何してるんだろう。」

とりあえず、ほおっておくことにしよう、君子危うきに近寄らずというし。

そして、のっそりひっそり美少女の後ろを通り過ぎたときだった。

「待て！」

「うえい!？」

ぱつと浅葱の方を振り向いて、美少女は叫んだ。

その瞬間、ぱしつとポニーテールが浅葱の頬を直撃したのだが、気にしないことにした。痛いけど。

「えーっと……………なんすか？」

心なしか口調が変わったような気がするが気だけだ。たぶん。

「……………匂い」

「俺くさいっすか!？」

「違う、……………神の匂い。それも……………あんだ、アテナに会った？」

いきなり核心をつかれた。

「え、ええ、……え、え？」

「はぐらかさないで。アテナよアテナ。戦いと知恵の神様。あったでしょ？」

じい、とそのきつい感じの大きな瞳で浅葱を見る（というかにらみつける）。

「えーっと、どちら様？」

もしかしたらアテナの知り合いかもしれないので、尋ねておく。

「あたしはアルテミス！狩猟と月の神であり、アテナと同じオリュンポス十二神の一人で、アテナの“絶対”の無二の親友なの！」
にっこりと笑って、宣言した。

「無二の……しん、ゆう？」

「お。信じてないな。用心深い……、気に入ったわ」

いや、気に入られても困るんですけど、という言葉がのどまででかかったがどうにか押し込んで、

「え、いやいや、そういうわけじゃないっすけど」

とりあえず、味方と断言してもよいのだろうか。

——あ。

「そういえば、アテナが“アルテミスにあつたら面倒だし”っていつてたような……」

その言葉を聴いて、ぴく、とアルテミスと名乗る美少女は動いた。
「そう、そういうことを……やっぱり、あたしの推測は間違つてなかったみたいね……」

何かをつぶやいた後、自称アルテミスはきびすを返し、歩き始めた。

「行くのか？」

お茶でも出そうと思ってたのに、と浅葱は思っていたのだが。

「ええ。アテナが何をしたいのか確信をもてたからね。行くわ」

「そうか……」

浅葱がうなずいたときだった。

爆発音。

「っ、アテナッ!？」

「・・・・・・あ、てな・・・・・・?」

アルテミスの切羽詰ったような顔が見える。

「アテナ、なのか・・・・・・?」

「ええ、ほぼ九十パーセントの確立。この神気感覚・・・・・・高レベルで純粹なところ、あの子と同じものよ」

その言葉に、浅葱は押し黙った。

——今も、アテナはゼウスの追っ手と戦っているのだろう。

俺の、知らないところで。

そんな浅葱の心情を知ってか知らぬか、アルテミスはにっこりと笑って

「ここで待ってて」

「・・・・・・え？」

一瞬何を言われたのかわからなかった。

アルテミスは言う。

「これは、神の戦いな。あんたたち人間の出る幕じゃないの。だからもう、日常へ戻って法が良い。これ以上突っ込んだら、戻れなくなる」

つまり。

お前には関係ないから、首をつっこんでくるな、と。

そういうことか。

「・・・・・・で、も」

「?なに。迷う必要なんかない。罪の意識を感じる必要もない。だって、すべて、あたしたちの問題——」

「俺は、行く・・・・・・っ!」

アルテミスが後ずさるほどの信念の光を宿して、浅葱は宣言した。そう、行く。

なぜだかわからない。なぜそう思っのかかわからない。だからこそ、行くのだ。

この思いに、答えを出すために。

「・・・そう」

アルテミスはしばし考えていたようだが、それでも、うなずいた。
わかった、と。

* * *

第一章 戦いは女神とともに舞い降り、散る その5

* * *

空を翔る人影が二つあった。

——というか、浅葱とアルテミスだった。

「うわちよちよちよ、おち、落ちるつつっ！！！しぬ、しぬから！
！！！」

「大丈夫、落ちるわけじゃないでしょうが。こっちは神なのよ？飛ぶなんて赤子のころからできるんだから！」

「いやそういう問題じゃねえよ、と思いつつ浅葱はそれでもあがき続ける。」

だって、ここは高層ビルレベルの高さなのだ。

いくら落ちないといわれても、怖いものは怖い。

ついでに言うと、アルテミスに“飛行術”というものをかけられて飛んでいて、現在アルテミスが手を引いてくれているという青春男子ならものすごくらやましがる状況にいるのだが、いかんせんこの高さで生来の鈍さでそこまで思考が追いついていない。

「うつうつうつ、こえー。なんかめっちゃくちやこえーし」

「ったく、弱いなあ。なに？人間ってそんな弱いのか？」

「弱いわ！お前ら神と一緒にたにするな！」

「はいはい」

そんな他愛ないことを話しつつ、ずっと飛行していると、たくさん
の化け物が空中にただよっていた。

「……………妖怪？」

「違う、使い魔ってとこ」

「使い魔……」

「動物や人間に力を与える、または自ら生み出すことによって得る兵器。もちろん使い手によってレベルは違うけど……さすがゼウス様。なんて高レベルな……」

ゼウス様？と浅葱は疑問に思ったが、その前に、
「あなたたち、だから、しつこいのよっ！！いつまでおってくるつもりなの！」

その声が聞こえた瞬間。

「えっ？」

アルテミスが手を離し、「アテナ！」と叫んだ。

「え、えええ、お、おちっ」

あたふたとする（でも落ちてない）浅葱をほっぽりだし、アルテミスはアテナの元へ駆け寄った。

ついでに抱きしめた。

「むぎゅ——！？」

「アテナ——っ！！連絡よこしなさいっていったでしょ、あたしっ！たく、もうもう、なんでこんなことばかりするのよ！！」

「く、くるし……」

アテナがばんばんとアルテミスの背中をたたく。

そこでようやくアテナから離れたアルテミス。

「う、うう、そんないきなり抱きついてこなくても……あ、る？」

「……っ、ば、か……」

ぼろぼろぼろ。

アルテミスの瞳から、透明な涙が流れ落ちる。

「……ごめん、なさい……で、でも、私っ！」

「わかってる。あの子のために何かしなくちゃならないって、思ってるんでしょ……わかってるんだから、頼りなさいよお、馬鹿……」

いまだに泣きじゃくる親友に、あたふたとするアテナ。

しかしそれを敵は見逃さない。

「全軍向かえ——ッ！」

隊長格らしき人（？）が叫んだ。

それに伴い使い魔たちが襲ってくる。

——それを。

「邪魔するな、——“月の氷”」

グイン、とアルテミスの体の回りに魔方陣のようなものが浮かび、その魔方陣の中に浮かぶ氷が使い魔たちへ飛ぶ。

使い魔たちはいつせいに氷の矢に串刺しになった。

「相変わらず、とんでもない正確さと威力なのね」

「あんたにいわれたくないわよ」

あはは、と笑い合う二人。

そのときだった。

「………っ！！！」

アテナをかばうようにアルテミスが使い魔とアテナの対角線上にたった。

そして、ドサ、とアルテミスが倒れる。飛行術を使っている影響だろう、地上におちる、ということはなかった。

「………あ、る？アル？アル！？」

親友を揺さぶっても、なにも反応がない。

ドクドクと背中から血が流れ出し、体温がどんどん下がっていく。これは。

背中に、突き刺さっているものは。

「………あ」

一人の使い魔から伸びた、獣のような爪。

それだけわかれば十分だった。

ぶちり、と頭の血管が切れたような感覚がした。

ゆらり、と少女歯はたつ。

「っ、お前たち、よくもアルを——ッッッ！！！！！」

激昂で叫ぶアテナは、そこではた、と気づいたようだった。

「・・・・・・・・あ、さぎ？」

「アテナ・・・・・・・・」

びく、と身がくすむのがわかった。

（怒って、る・・・・・・・・）

静かに湧き上がる闘志。そして、純粹で、どこか物悲しい怒気。彼女の気持ちからなのか、意図的なのかはわからないが、どんな高次元のエネルギーが彼女のところへ集まっている——否、湧き上がっている。

アルテミスを傷つけられたことに怒っているのか。

それとも、赤の他人である浅葱を巻き込んだことに怒っているのか。

浅葱には判断がつかなかった。

（そういえば、あいつ、追われてるって・・・・・・・・）

いまだに残っている使い魔を見ながら、浅葱はたずねた。

「・・・・・・・・お前、追われるようなことをやっていたのか？」

「つ・・・・・・・・私の、悲願を食い止めようとしているだけよ」

アテナの言葉は、端的で、それでいて正確であるような気がした。でも、悲願、とは。

食い止められるような、悲願、とはいったい何なのだろう。

「アル・・・・・・・・“鉄壁の防御”」

つぶやくと、シュン、と子気味よい音がして、筒状の結界がアルテミスを守る。

さらに、突き刺さった獣の爪を途中で切断した。途中、「うぎゃあ！」という声が聞こえたが、彼女は気にしない。

そしてそれを見届けると、アテナは浅葱に背を向け叫んだ。

「お前たち！」

アテナの怒声が当たりいったいを轟かせる。

ぎょっとしてアテナを見る浅葱をアテナはほっという、彼らのいるさらなる上空へと飛んでいった。

「アテナ！」

「ここで待つてて！」

浅葱の叫びはあっけなく振りほどかれ、アテナは彼らの前に騒然と降り立った。

「お前たち……もう一度、一応聞いておくわ。お父様——ゼウス様の追っ手よね？」

ほんの少しばかり語尾にさびしげな色が浮かんでいたのは気のせいだろうか。

でも、ここからでは彼女の顔は見え、真偽はわからない。

そうだ、と答える声がした。

その答えにアテナは一瞬だけ、ビク、と肩を震わせ——刹那、大量の力の塊がアテナの右手の周りに集まってきた。

「顕現せよ！我の象徴、槍！」

キイイイイン、と金属音に近いものが聞こえ、そしてパアンつと光がと飛び散った後、彼女の手には槍がしっかりと握られていた。そして、それを力をこめて横になぎ払った。

それを直撃したものは掻き消え、その余波を受けただけで消えるものもいた。

「……ふん、出来損ないの、忌み子が……」

異形のもの一人が悔しげにつぶやき、消えた。

その言葉に、アテナは今度こそ肩を大きく震わせる。

「忌み……子……？」

わけもわからずその場を見ているだけだった浅葱は、その言葉に疑念を抱く。

忌み子とは、いったい。

そして、一方のアテナは、ぎゅ、と槍を持つ力を強め、しかし、弱弱しくつぶやいた。

「……そんなの、わかってる、わよっ」

駆け出すアテナの横顔が一瞬見えた。

「……っ」

その顔には、悲しみが並々とあふれかえっていた。

それでも、勇敢にも無数にいる異形のものに切りかかっていき、次々となぎ払い、消していく。

だが、いかにせん数が多すぎた。

消しても消してもいなくならない大量の異形のもの。

目に見えて、アテナの疲労が見えてきた。

「・・・・・・・・」

浅葱は、ぎゅっと唇をかんだ。

使うのか、3年間封印してきたこの力を。

彼女のために、見ず知らずの、神のために。

自らが語りかけてくる自問に、浅葱は答えた。

——守る。

守らなきゃ、いけないんだ。

わからないけど、そうしなきゃいけない気がする、と。

もう一人の自分が、そうか、と笑った気がした。

口を大きく開けて、大切な言霊を叫ぶ。

ふつみたまのつるぎ

「布都御霊剣！」

布都御霊——それは、鹿島神社に宿られている建御雷神のもので、荒ぶる神を退ける力を持つ——いわゆる、“神殺し”の剣。

当然、その剣の霊力は退魔の力を持つ。

大きな内反りの剣を構えて、浅葱は叫んだ。

「アテナ！」

それは、戦うという意味表示なのか。

それとも、守る、という意味表示なのかはアテナには判別できな

かったが——

戦いのはじめを告げることとなった。

浅葱はかける。アテナの元へ。

その最中にも使い魔は襲ってきたが、それをばっさばっさと切り裂いて突き進む。

（浅葱・・・・・・・・）

なんとなくは、察していた。

彼は、強いと。戦力になりうると。

でも、巻き込みたくは、なかった。

彼の優しさを利用することに、ためらいを覚えた。

だが——今、彼は自分のために戦ってくれている。

だからこそ。

彼女は浅葱を守るのではなく、共闘することにした。

下からかけてきた浅葱がアテナの元へたどり着く。

「っ……………アテナ」

その様を少しだけ笑って

「……………死んだって、知らないわよ」

「そうなりや上等だ！」

そんな減らず口をたたきつつ、二人はばけものを切って切って叩きのめしていく。

浅葱の剣が空を舞う。

アテナの突き出す槍が化け物を貫通していく。

それは凄惨な場面であるはずなのに、どこか美しく、どこまでも鮮やかだった。

「……………あなたの剣……………」

「布都御魂剣か？」

「そう、それ。あなたが使ってるもの自体は本体ではないわね。本体は、どこかに祭られてる？」

「……………鹿島神社にな」

「ああ、ってことは、あなたの一族って、その司祭だったりするのね？」

「……………まあ、な」

「で、今あなたが使ってるのは、血に刻み込まれた“カタチ”に靈力を流し込み、具現化させたもの、か……………」

もしも彼女が科学に聴かったならば、

『DNAに“布都御魂剣”を宿らせるための情報が入っている』

とでもいつていただろう。

でも、幸か不幸か彼女は科学に疎かったので、そういう言い回しをした。

「そろそろ、向こうもやられっぱなしじゃないだろ」

浅葱は剣を振るのをやめないままアテナにいった。

「……随分手慣れているのね、こういう化け物との戦いに」
「……代々、俺の一族はコレを守るために、ご神体を守るために、神域に入り込んでくる不届きものの輩をおっぱらっていたからな」

苦々しげに、苦しげに言う浅葱の顔を、アテナは気づかなかった。
は、と浅葱は目を見開き、嫌な予感が体中を巡る。

そして、浅葱の予感は当たっていた。

「……………！！！！！！！！」

聞き取れない理解不能の言葉を引き金に、爆発音が唸った。

「……………えっ？」

一番最初に反応したのはアテナだ。

「……………な、にが……………」

爆発音のせいで耳に衝撃が走りろくに聴覚が聞かない浅葱はきよるきよるとあたりを見渡した。

「……………はっ？」

あたりが、夕焼けに、染まっている。

おかしい、なんでだ、だって今は朝だ。

混乱する頭の中で、唯一、アテナの声だけが聞こえた。

「……………あの、馬鹿ッ！人間を巻き込むなッ！」

（人間——まき、こむ……………？）

アテナの言葉にはっと気づく。

この赤は夕焼けではない。

この、赫は——

「……………人、の……………血……………？」

8年前の記憶がフラッシュバックする。

*

*

*

第一章 戦いは女神とともに舞い降り、散る その6

* * *

次に目が覚めたのは、二日後。

「・・・・・・・・ん、ここ・・・・・・・・」

見慣れた天井が、浅葱の視界に移っている。

ちら、と横を見るとアルテミスが横たわっているのが見えた。

（よかった・・・・・・・・）

あの後、戦火に巻き込まれて傷ついていたら、と思ったのだが、さすがアテナの作った結界。その程度では傷ひとつかなかったらしい。

天井に手を伸ばそうと腕を動かそうとして、ズキン、と右手が痛むことに気づいた。

（そういえば・・・・・・・・久しぶりに、布津御魂剣つかったから・・・・・・・・さすがに、無茶だったかな）

苦笑する浅葱の視界に、ぴよこん、と覗き込む顔が現れた。

「うおっ!？」

「浅葱っ!?!」

ぎゅうううう、と力いっぱい抱きしめるアテナに、ぎぶぎぶぎぶ、と徐々に霊力やら布都御魂剣を使つてりしてわりかとぼろぼろな浅葱は表現する。

でも感無量な彼女はぜんぜん気づかなかった。

「ごめんね、ごめんね、私が巻きこんだから、だから、ごめんね・・・・・・・・っ」

顔をぐしゃぐしゃにして謝罪するアテナをどうしようとあたふたする浅葱。

っていうか、神様のくせに泣き虫だなあ、と浅葱は失礼なことを思った。

「いや、あの、別にいいし……」

「ごめんなさあああいつ!!」

さらに抱き締め上げるアテナ。

もう女の子（しかも美少女）に抱きつかれているという男子の大半が願うようなシチュエーションに浸る余裕もない。（アテナは神様であるがゆえにその握力もすごいのだ）

むしろ、ここまでくれば拷問である。

とりあえず、必死に懇願して、彼女を引き剥がした。

「え、とき。あのあとどうなったんだ？」

「あの後……浅葱はどこまで覚えているの？」

「……世界が、夕焼けに染まったとこまで、かな」

「……あの後、浅葱は叫びながら、霊力を放ったわ。それも尋常じゃないレベルで」

そう、人間にしては最高位に入るレベルの霊力の質と量。

アテナでさえ、あの霊力には目を見張ったほどだ。

「そして、その霊力を以て化け物たちは一人残らず霧散した」

「霧散……じゃあ、世界、のほうは……」

「ああ、あれはね、私も冷静になってから気づいたんだけど……
……。あいつらの幻術だったらしいのよ。人を惑わせ自滅させる。
だから、別に誰も死んでないわ」

その言葉に、浅葱はほっと安堵した。

と、同時に幻術を見破れなかった己の無力さに、腹が立った。

（まだまだだなあ、俺も……）

そう思うことが、懐かしくて、つらくて、苦しくて。

浅葱は、ぎゅ、とこぶしを握り締めた。

そんな浅葱にアテナは微笑む。

「浅葱、ありがとね」

「・・・・・・？」

「助けてくれた。一緒に戦ってくれた。本当に、ありがと」
にこり、と花のように笑って、アテナはお礼を言った。
「ただ、花は儚いもので。」

「慈しみ、愛おしく眺めている間に零れ落ち、消えていく。
それを、今のアテナから感じた。」

「っ・・・・・・！」

どこからかあふれてくる焦燥感に胸が締め付けられる。

アテナが立ち上がった。

「だめだ、と反射的に口に出してしまった。」

「え・・・・・・？」

「だめ、だっ・・・・・・！」

「・・・・・・なにが」

アテナの面差しが硬く強張るのが見て取れた。
でも浅葱は止まらなかった。

「だって。」

「出て行く、つもりなんだろうっ・・・・・・！」

「・・・・・・当たり前じゃない」

「だって。」

「そんな、顔をして。言えはいいいじゃないか。自分の気持ちを」
「・・・・・・何を・・・・・・」

「だって、彼女の声音は、彼女の瞳には。」

「寂しい、って、訴えているくせに」

「——っ！！！！！」

「今度こそ、アテナは息が詰まった。」

「そう、初めてあったときから感じていたこと。」

「彼女を見捨てて置けなかった理由。」

「それは——さびしそうで、今にもつぶれそうに、弱かったから。」

「っ、うるさいっ・・・・・・。そんなわけあるかっ！寂しい、だな」

んて……私は神なのよっ！？そんな、人間のようにくだらない感情に踊らされるなんて……」

アテナは必死に否定する。

だけど、それすらも、脆く感じて。

「……いえば、いいのに。神とか人間だから、じゃない。心が、そういつているんだから、きちんと言えればいいんだ」

浅葱は手を伸ばし、アテナの手をつかむ。

ビクッ、とアテナの肩が揺れる感覚がした。

かまわずに浅葱は続ける。

「寂しいなら、言えばいい。苦しいなら、言えばいい。つらいなら、いえば、いい……」

言葉をつむぎつつ、浅葱は自嘲した。

（馬鹿だな、俺——こんなこと、言える資格なんてないのに）

それでも、この少女にはいわなければならぬ気がした。

いわなければ、いつまでたっても硬い殻の中に閉じこもってしま
う。

弱い自分を守るために。

浅葱の手に、雫が降ってきた。

一滴。

一滴。

そして、とどめなく。

「う……うあ、ああ……私、は……」

「……うん」

「私、はっ……弱音、なんて……吐くつもりじゃ、
なかったのにつ」

「……うん」

「……うう、うあ、あんたの、せいよ……」

「……うん」

「……せき、にん。とれっ……ばっ」

泣きじゃくり続けるアテナの頭を。

浅葱はずっと、
なで続けていた。

第一章 戦いは女神とともに舞い降り、散る その7

* * *

「はじめまして」
初めてであった“トモダチ”は、そういつて手を差し伸べてきた。
どうしていいかわからず、私はただじっとその子を見つめるだけで。

そんな私に彼女は苦笑して、

「ほら、手、だして。そんなくらいとこなんかいないで、光の中にいこうよ」

もう一度、手を差し伸べた。次は、きちんと彼女の手をとり、私はたった。

「ねえ、きれいだね。この世界は、きれいできれいで、だからこそ、だいっきらい」

そういう彼女の顔は、様々な感情に彩られていて。

どこか、悲しげで、さびしそうで。

自分も、こういう顔をしているのかな、と少しいやになった。

「私ね、決めた。あんたに誓うことにした」

月光の中、彼女はにっこりと微笑んだ。

「私は、“絶対”あなたの親友でいるわ
ぜったい、と私はつぶやいた。

「絶対っていうのは、そうね、決して破らない、ってことかな？この誓いを、決して私は破らないわ」

そして、たくさんの約束をした。

“絶対”の約束。

どこか気持ちよくて、ふわふわと空に飛んでいってしまいそうな自分をこの世界へとどめておく鎖。

そして、だからこそ、私はこの道を行くのだ。

彼女の願いを守るために。

最善を尽くして。

泣いてしまうかもしれないけど……ううん、あの泣き虫のあの子のことだから、絶対になく。

そう断言できることが、誇らしくて、悲しかった。

大好きだからこそ、この決断をした。

どうか、うらまないでほしい。

だって、全部、あなたのためなのだから。

あなたが大好きという証拠、絶対、明かして見せるから。

だから、ごめんね、あなたを、悲しませてしまいかもしれないけれど。

それでも、私は。

* * *

「私はね、“アテナ”であって、“アテナ”じゃないの」

それが、落ち着いて最初にアテナが言った言葉だった。

「……は、あ？」

「ずーっと、ずーっと、昔。覚えているのも馬鹿らしいくらい昔に、私達は生まれた」

「……達？」

浅葱が覚えている限りでは、アテナという戦争の神は一人だったはずだ。

「そう、うまれてきたときは、一人。でも、二つに裂けられた」

「さけ、られた……」

って、どういふことなのだろう。

はてなマークが頭を占めてしまった浅葱を苦笑して、アテナは言葉が続ける。

「ご主人様——あ、これがもともとのアテナね。で、ご主人様が生まれてくる前に、予言がされたの。『この子はゼウスの地位を奪う』ってね」

もともとゼウス（アテナの父）は自らが父を殺し王位を手に入れたのだ。

それがわが身に降りかかる。

それを危惧するのは、当然だった。

「だから、ご主人様が生まれてくる前に、お母様を飲み込んだ。って、まあこれは人間の勝手な解釈で、お父様という“モノ”の中にある異界に、お母様を閉じ込めたの。魔術を使って」

「閉じ込めた……」

「すべては王位を奪われないため。ご主人様を産ませないようにするため。そのために、お母様を閉じ込めた。でも、生まれてきてしまった」

メティスという、アテナの母は、知恵の神であり、その“最上の賢さ”を以て、異界の中で“アテナ”を産んだ。

「そのときに、アル——アルテミスに出会ったのよ」

ふふ、と笑って横たわるアルテミスの額をなでるアテナ。

それは、メティスの采配だった。

アテナと同じように、ゼウスの正妻——ヘラにいじめられ、あまり友達もおらず、苦労者だった彼女と友達になれば、二人とも救われるだろうと。

「異界の抜け穴からやってきて、遊んでくれる彼女は、“私”にとっても、“ご主人様”にとっても、大切に大切に、大好きな、たった一人の、親友だった」

しばらくは、幸せな日々が続いた。

アルテミスがいて、それをみている母がいて。

それほどまでに、巧妙に、巧妙に隠し通してくれた母。

だが、見つかってしまったのだ。アテナの存在を。

「お父様は狼狽した。母親からの“知恵”と自らの“力”。それらを合わさって生まれた子供。もしかしたら、自分を倒してしまえるほどに強いかもしれない。そして、実際そうだった」

異界の中へ精神を飛ばし、“アテナ”を見たゼウスは改めて、戦慄を覚えた。

ありえないほどの量の神気。

利発そうなその面差し。

この子は、まさしく、予言どおりに自分を倒して王位を奪ってしまいかもしれない。

「だから今度はそれを二つに裂いてしまえばいいのだ、とお父様は思いついた。このままではこの異界の周りをご主人様の多大な神気が食い破ってしまうかもしれないから。そして、割かれた。そのとき、私とご主人様は二人になった。ご主人様は閉じ込められた——異界の、ふかい、ふかい、ところへ。最奥地へ」

アテナは、ぎゅ、と目をつぶった。

そうすれば、聞こえてくる、片割れの嘆き。

「聞こえてくるの。目を、閉じたら。」

——助けて。

——こわいよ。

——くらい、暗いよ………。

だから私は助けるの。助けたいと思う。あの方のために」

その目には、真っ直ぐな光が宿っていた。

どんなことをしても、助ける。

アテナの瞳には、そう書いていた。

「………そう、か」

なるほど、だからゼウスの追っ手が。

娘を復活させないために。

己の地位を守るために。

それがわかった瞬間、浅葱には、ふつふつとした怒りが湧き起こっていた。

「……………いいよ、俺。お前を手伝ってやる」

「……………何を言っているの」

「だって、お前一人じゃ、大変だろ？」

それに、こんな話を聞いた手前、助けないわけには行かなかった。

「……………だから、話したくなかったのよ」

「わかってる」

「わかってない、全然わかってないっ！！！！！」

アテナの怒声が響いた。

「私を助けるということは、そこらの化け物退治とは違うのよ！？神界の中でも最上位に入るお父様を相手にすることなのっ！悪けりや命さえ落とすわ！あの人は自分の地位のためなら何だってやる！たかが人間一人の命なんぞ、あの人の前じゃ、塵にも及ばないの！わかってるの！？」

たしかに、ゼウスという強敵を相手にするのだ。

正直、怖い。

——だが。

「でも、俺は、お前を、助けるっ！」

浅葱の声に、正氣に戻ったアテナは一瞬でその無意識に放っていた神氣を収め、

「何で、そこまでするの」

と、問いた。

「何でだろうな……………わかんねえ。でも、しなきゃな、って思うんだ」

「……………理解不能よ」

ぱつぱつと切り捨てたアテナに浅葱は苦笑して、布都御魂剣を顕現した。

「……………?」

「俺な、この剣、だいつきらいなんだよ」

「………なんで？」

「この剣が、すべてを奪ったからだ。——正確に言うと、この剣の持ち主の神様だけだな」

浅葱の一族は、代々この布都御魂剣の持ち主——建御雷神を祭ってきた。そして、その力をかりて神域を守ったり、あのあたりを跋扈する妖怪を退治してきたのだ。

「俺には年のはなれた姉がいたんだ。俺のお姉ちゃんはかなり力の持った“術者”であり、数百年に一度といわれる絶大な“巫女”の力を持つて生まれた」

布都御魂剣のちからを引き出すことができる——“術者”。

建御雷神のちからを操れ、神を鎮めることができる——“巫女”。

両方の力を持ち、強力な“次期当主”となった姉は——驚くほど、病弱だった。

まるで、その“力”に命を吸い取られているかのように。

「まあ、ありえなくはないわね。神気とは純粹であるがゆえに、人にとっても“毒”となりうるから。命が縮んでも、なんらおかしくはないわ」

「………っ」

アテナの言葉に、浅葱は剣を固く握り締めた。

そんな浅葱を見て、アテナの目を伏せる。

「………では、それが原因でその、姉君はしんだの？」

「………違う………いや、違わなくもない、か」

「………どういう意味？」

あれは、雪の降る、寒い冬の日だった。

姉に引かれていつものように妖怪退治に行っていた矢先に、事件は起こった。

「妖怪に、襲われて………いつもなら、勝てたはずだった。けど………」

当時浅葱は7歳で、もっぱら戦うのは姉だったのだが——

間の悪いことに、姉は倒れてしまった。

彼女の体に冬の寒さはこたえたのだ。

「必然的に、俺が戦うことになったんだけど……怖くて、ひざが震えて……恥ずかしいことにしりもちついちゃって……」

殺される、と思った。

ああ、俺、死ぬのかな、と。

——でも。

「お姉ちゃんが、最後の力を振り絞って、術をかけて妖怪を倒して——でも、そのときに妖怪から傷を受けて……ただでさえ倒れるほどだったおねえちゃんには、致命傷で……」

血まみれになって、自分に寄りかかってくる姉。

血しぶきが、舞って。

怖くて怖くて、どうしようもなくて。

「……でも、姉君が死んだ理由にそこまで憎むほど、そこ神はかわってなかったと思うけどな」

「……ちがう、んだ……俺、聞こえたんだよ……」

姉の魂が、連れ去られていくとき。

——よく、やった。

低い低い、地響きのなるような声で、そういったのが聞こえた。

何か確認できるものが合ったのではない。

ただ、本能が。

直感が、そう告げていた。

「あれは、建御雷神の声だった……！あいつが、そういったんだ……！」

『……』

神の命令か。

神の意図か。

浅葱にはよくわからないが、それでも、神がかかわっていたのは

事実。

「だから俺は、家を出た。全部、忘れたかったんだ。
姉のことも。」

神のことも。

俺の、——無力さも」

浅葱の声は震えていた。

その声音は、さびしそうで、悲しそうで、なにより、悔しそうだ
った。

「浅葱は、弱くなんかないわ」

そんな心からのアテナの励ましに、浅葱はふるふると頭をふって
「弱い。弱いんだよ。俺、怖いんだ。人が死ぬのも、自分が死ぬの
も。そんなやつが、どうして戦えるんだよ。おかしいだろ？俺は・
・・・」

「でも」

浅葱の言葉をさえぎって、アテナは言った。

「あなたは、私を助けてくれた」

「・・・・・」

「だから、弱くなんかないわ」

ぎゅ、と浅葱を抱きしめるアテナ。

「・・・・・！？」

「大丈夫、弱くなんかない。私が保証する。浅葱は、とってもやさ
しくて、強いわ」

アテナの言葉に、浅葱は泣きそうになった。

彼女の言葉が優しくてやさしくて。

「・・・・・大巫女様・・・・・おばあちゃんは、俺のことを
だめだって言っただ。弱いし、男だし。なんで、命を賭してまで
お姉ちゃんを守らなかつただって、しかった」

どうしてくれる、と。

鹿島家の血が途絶えたら。

巫女がいなくなってしまうたら。

どうしてくれるのだ、と。

「それは、違うわ」

「ちが、う………?」

「浅葱は、生きていていいのよ。——ううん、生きてなきゃだめ」

「——っ………」

アテナの言葉に、胸が震えた。

そう、それは、ずっと抱いていた疑問だった。

自分は、生きていていい存在なんだろうか、と。

自分に尋ねて、答えは出なくて。

自問自答の繰り返し。

「いい、のか………?俺は、生きてて………」

「当たり前だよ」

もう一度、強く抱きしめられて。

浅葱は、自分は生きていいのだと、心に刻み付けた。

* * *

第一章 戦いは女神とともに舞い降り、散る その8

* * *

そして、夜。

浅葱が寝静まった後だった。

アルテミスはベランダの柵に腰掛け、月を見上げていた。

「…………ふう」

彼女は月の女神だ。月の光は力を与えてくれる。

それに、あの夢そうでもしつかりと空に浮かぶ月が、彼女は大好きだ。

そのとき、がさ、という音が聞こえた。

その足音だけでだれかを彼女は看破した。

「アテナ？」

「うん、アル、また月見てたんだね」

アルテミスの横に腰掛け、アテナも月を見上げた。

「懐かしいね、昔もこうやって、三人で見上げたね。あの世界から懐かしそうに目を細めるアテナを、アルテミスは複雑な気持ちで見つめていた。

（三人……………か……………）

そんなアルテミスのアテナは気づかないフリをして

「歌ったよねえ、私たちの歌」

「ああ……………そうだね。たしか……………“月と戦火”だったっけ？」

「そうそう。ね、歌おうよ」

にっこりと笑ったアテナに、アルテミスはこく、とうなずいた。

『月の女神は地上におりたち

戦火の中を駆け巡る

戦火の中を率いるは

それを司る女神の姿

二人の女神は空を駆け

敬う人間は彼女たちを創造する

全ては巡り、すべては終わる

暗黒に降り立つは小さな灯火

そして今日も、血が流れ

悲劇惨劇、繰り返される』

歌い終わると、アテナは綺麗な瞳をアルテミスに向けた。

アルテミスは、それだけで何を聞かれるのか分かった。

「聞いてたの？」

「……………ごめん」

浅葱のアパートのベランダで、二人は向き合う。

月は二人を照らし、山吹色に輝く。

「うつん、なんとなく、おきてるかなって思ってたけど……………」

「そこで言葉を止め、ぽす、とアルテミスを抱きしめるアテナ。

「っ!?!?!?」

顔を真っ赤にしながらそれでも引き離さないアルテミスに笑いかけて、

「大好きだよ」

直球ストレートだった。

「え、えと、あなた、突然どうしたの……………?」

アテナは自嘲気味に笑った。

「……………私も、生きてちゃいけない存在なのにな」

「……………そんなこと、ない」

アテナの頭をなでながら、アルテミスは否定した。

「あなたは、あたしの生きる糧なんだから」

「……………私も、アルとご主人様と母様がいればよかった……………」

・・・アル、ねえ、アル」

「・・・になに？」

「“私”とであつた日のこと、覚えてる？」

「当たり前でしょ」

忘れることのできない、大切な一日なのだから。

どれだけ時がたつても、色あせることのない、“絶対”の記憶。

「そっかぁ・・・ん、私も覚えてるよ。大好き。いつまでたつてもかわらず大好き。だから、さ。・・・泣かないでね？」

「・・・っ」

アルテミスは押し黙った。

彼女が今から何をするのか、そして、その結果彼女がどうなるのか、知っていたから。

「“絶対”の約束にするには、きつすぎるかな？」

「・・・無理。泣く、“絶対”」

「・・・もう、無茶ばかり」

でも、そこも好きだ。

冷徹に見えて、でも本当はやさしくて傷つきやすい、そんなかわいアルが。

「・・・行かないで・・・」

泣きそうな声でつぶやいたアルテミスに、それでもアテナは首を立てには振らなかった。

もう、親友の自分で求められないと知っておきながら。

それでもアルテミスはあがいていたかった。

「ごめんね」

「・・・形ばっか」

「うん、ごめん。ほんとにごめんね。私は、もうアルの言葉でさえ、止められない。だから、ごめんね」

アテナの謝罪に少し膨れながら言う。

「昔っから、ホント頑固。あんたはいつもそう。自分が決めたこと

は絶対に曲げない」

「信念が強いつて言ってほしいなあ」

苦笑するアテナに、ぽつり、とアルテミスはこぼす。

「……でも、そこも好きだから」

「……うん。ごめんねアル。私なんか友達になつて。こんなつらい思いをさせ——」

ぎゅう、と逆に抱きしめられた。

「謝るのは飽きた。どうせ、謝つたつて行くんでしょ？」

「……うん」

「なら、大好きつて言つて。アルつて、もつと呼んで。あんただけに許した呼び方なんだから。絶対、誰にも言わせない。……大好き」

そう、昔々に、“アテナ”が決めたアルテミスのたった一人だけが使えるあだ名。

大切に、大切にしてきた。

「アル……うん、大好き。私も大好き。だから、泣いてほしくないの。笑っていてほしいな。ご主人様が、悲しい思いをしないように」

「……あの子の気持ちも考えて、やっているの？」

「……ご主人様は嫌がつているわ。でも、でもね。あの人が救われるなら——私は、あの人の気持ちさえ、考慮しないわ」

「……身勝手」

振る絞るような声に、アテナは

「……知つてる」

一言、返したただけだった。その言葉にかつと、頭に血が上る。

「身勝手身勝手身勝手……全部勝手よ、そんな……自己満足に過ぎない……」

「うん、それでもいい」

その言葉を聴いたアルテミスは、もう本当に手遅れなのだと知った。

言葉が、体が、震える。

「大嫌い……」

「そういわれるのは、悲しいな」

行つてほしくなんかないのに。

それでも、彼女は行くのだろう。

まぶしいくらいの信念を持つて。

「じゃあ、行かないで」

「……ごめんね」

「そんなの思つてないくせに」

「……大好き」

その言葉に、アルテミスはもう、だめだった。

「う、うあ、うあ……ん」

涙腺が崩壊し、とどめなく涙が流れてくる。

「ごめんね、大好きだよ」

「大好き大好き大好き！！行かないで！！行かないでよぉ！！あたしを一人にしないで！！私を残していかないで！！大好き、大好きだよ。だから、行かないで。泣かないなんて無理に決まつてるじゃない……！お願いよ、お願い、行かないで……」

そう叫びながら、それでも行くのだろう、とアルテミスは思う。

そして、それは当たつていて。

「……私もだよ、大好きだよ。でも、それでも……
行くの。私は」

「……大嫌い」

「……それに、一人じゃないでしょ？あの人がいるわ」

「……大好き」

さつきから相反したことを言っているアルテミスにアテナは苦笑して、ずっとずっと抱きしめて。

月の女神は、月光の中で、いつまでもいつまでも泣いていた。

第一章 戦いは女神とともに舞い降り、散る その8

* * *

あの日、私は彼女に聞いた。

こんなことを言つては、責任転嫁に聞こえるかもしれないけれど。

「ねえ、あなたの望むことは何？」

その問いに、彼女はにっこりとわらつて答えた。

「もちろん、二人が生きていること！」

そう、と答えたのか、あはは、と笑っていたのかそれは覚えていない。そんなことはどうでも良いし、思い出しても仕方がないから。でも、この答えだけは刻みつけよう、と誓った。

彼女の望みを果たす。

だって、私の望みは、大切な人が笑顔でいること、だから。

そこには自分なんて含まれてない。だから自分なんてどうでも良い。

こんなことを言つては、あの子達に怒られてしまふかもしれないけど。

今日は満月らしい。

光が、この世を照らしている。

早く、見せてあげたい。

あの人に、この世界を。

あのちつぽけで狭い、暗い世界なんかよりも、きつときつと気に入るはずだから。

そのためには、何人かを泣かしてしまうことになるんだけど。しかもそれが大切な人たちだなんて、運命の神に文句を言ってるのかな。

ああ、でも――

「その時間すら、残されていないんだね……」

自分の呟きが、遠くに聞こえた。

夜空を見上げる。

人は空に天界があるといっているけど、それは違うのに。空なんかじゃない。

神は、そんなきれいな人ばかりじゃない。

例えば、あいつのように醜いやツもいるんだ。

そう考えて、いやな気持ち私が私を満たす。

これ以上考えたくもないから、私も眠ることにした。

この世のすべてから、逃げるために。

* * *

朝が来た。アテナは槍の手入れをし、アルテミスはどこか安心して弓の手入れをしていた。

昨日と打って変わったアルテミスの様子を怪訝に思いながらも

「今日、だよな」

「ええ、早いほうがいいわ。ゼウス様がほかの神々を集める前に。

――いやなら、いやって行っているのよ？」

「なに言ってるんだよ。行くに決まってるだろ」

でも、それより気になるのは。

「…………アルテミス？さん？」

「……………」

「なんで、そんなにぼーっとしてるんです？」

「というより、なんでそんな口調変わってるの？」

「アテナが口出しをしてきたが、とにかくにもこの放心っぷりはおかしい。」

もしかして、戦いたくない、とか。

「アテナ、何か知ってるか？」

「……………さあ、ね」

にこ、と笑ってはぐらかされた。

「というか、もう埒が明かないので行こう、とアテナが言った。」

「……………うん」

やっと口を開いたアルテミスの顔は沈痛で。

「……………？」

なにかあったのだろうか。

まあ検索しないほうがいいこともあるし、言ってくるまではまっ
てよう、と浅葱は結論付けることにした。

「じゃ、二人とも行くわよ。——扉よ、開いて——……………」

光の渦が、三人を包む。

そして、その瞬間に、彼らはいなくなった。

正確には、異界へ飛んだのだ。

わずかな風が、部屋に吹いた。

* * *

「……………よかった、たどり着けたみたい」

アテナの言葉が、どこか遠くに感じられた。

ここはどこだ。

墨を溶かしたような光の一点も差し込まない暗闇の空にぽつんと満月が浮かび。そこだけが異様に明るく。世界は物音ひとつとして聞こえない。暗闇の空から目を下に向ければ、森があった。針葉樹林が高々とそびえ立ち。獣など一匹もおらず、それがまた人に恐怖を抱かせる。

（――怖い・・・・・・・・）

浅葱は心底思った。

怖い、と。

こんな世界でアテナは生きていたのかと思うと、怖くて怖くて、同時に悲しくて。

この世界がゼウスというものが作ったものならば、そのゼウスというやつが、どれだけ残酷なのだろうと。

一方のアルテミスはじつと月を見据えていた。

懐かしい、などとは思わなかった。

憎い、とだけ思う。

（ゼウス様は・・・・・・・・ほんとうに、幾千もの時、あの子をここに閉じ込めていたんだ・・・・・・・・）

彼女はゼウスが嫌いだ。

父のくせに、娘を閉じ込めた彼が。

大嫌いで、憎くて。

殺したいほど、憎んでいる。

「・・・・・・・・」

そんなアルテミスの心情を知ってか、アテナはアルテミスにっこりと笑いかける。

それがまた、アルテミスの心をえぐる。

なんとも思っていないわけがないのに、そういうそぶりをおくびにも出さない。

だからこそ、心が傷ついているのを、彼女は気がつかない。浅葱が重い口を開いた。

「ここが・・・・・・・・ゼウスって、やつの異界なのか？」

その言葉にアテナはうなづく。

「そ。ここが、私の生まれた場所。さあ、進みましょう」
そのとき。

「それはならぬ」

人影が、こちらへ向かっていた。

「……………」

アテナとアルテミスの動きが止まる。

「わが娘が。私に反乱しにきたか」

低い、地響きのような声が彼らの鼓膜を揺らす。

どこか、建御雷神に似た声。

浅葱はおそろおそろたずねる。

「わが、娘……………じゃあ、お前は……………」

「お前という表現は気に食わぬな。人間風情が。いかにも、私がゼウスである」

ゼウスと名乗る男は足を止めた。

まるで、どうせ通れぬのだから帰れ、というように。

口を開いたのは、アテナだった。

「お父様、おどきになってください。邪魔です」

ぱつさりと切り捨てたアテナをゼウスは鼻で笑い、

「よくもまあそんな口を」

「格下にはそのように振舞えと教わりましたもので」

皮肉たつぷりのアテナの言葉にゼウスはぴくり、と動いた。

「格下、だと……………」

「ええ、あなたが封印しなくてはならないほど“私”は強いのです
よう？」

「ほざけ。あれは念押しじゃ。それに今、お前は二つに裂かれてお
る。負けるいわれはないな」

「そうですか」

そついった刹那。カキン、という金属音がした。

「えっ……………」

「アテナ、あんた・・・・・・・・」

いつの間にか出現していたアテナの槍とこれまたいつの間にか出現していたゼウスの矛が拮抗していた。

「アル。援護射撃をお願い。だって、格下のお父様のことから、使い魔を沢山用意しているはずよ。浅葱は使い魔を倒していてくれたら嬉しい。・・・・私は、この人を倒す」

浅葱が見渡すと、なるほど、確かに大量の使い魔が自分たちを取り囲んでいた。

「了解だ！」

浅葱は布都御魂剣を顕現し、ゼウスの使い魔を迎え撃った。

「・・・・・・・・アル」

「・・・・・・・・わか、った」

アルテミスも弓を顕現し、ゼウスについて、と向ける。

「ゼウス様、ご覚悟を」

「ふん、神々をすべての私の前に勝てると思うておるのか？」

「あたしだけなら無理でしょうね。でも、アテナがいる」

きっぱりとそう告げたアルテミスに、ゼウスは不機嫌そうに顔をしかめた。

「・・・・・・・・愚かも度がすぎると哀れなだけだな」

「何とでもいつてください」

「よいのか？私を倒せばお前の一番望まぬことがおこりうるぞ」
「・・・・・・・・っ」

ぐら、と崩れ落ちそうになるのを必死で抑えて、アルテミスは踏ん張る。

「アルが傷つくことをいうのは、やめてくださいませんか？」

カキン、とまた金属音がした。

アテナがゼウスに仕掛けたのだ。

「それを一番しているのは、お前だろう？」

「——そうですね、でも、いずれわかってくれるでしょう」

「身勝手だな」

「そういつて良いのはアルだけです、お父様」

アテナは一步下がってトンツ、と空中に舞い、ゼウスの後ろから攻撃しようとしたが、それを見切っていたようにゼウスはにやりと笑った。

はっと気づいたアテナはぱつとその場を離れた。そこへ、雷撃が落ちてくる。

「・・・・・・・・ちっ」

「舌打ちとは下品なものを。私の能力を忘れたか？雷を操ることだぞ」

ぱつぱつとアテナは移動をする。そのたびにアテナがいたところへ雷撃が落ちてくる。

「めんどくさいったら、ありゃ、しないわ！」

そう愚痴をこぼしつつ、アテナは神速ともいえるスピードでゼウスの下へ突っ込んだ。

「愚かなこと——ツツツツ！！！」

雷がアテナのところへ突っ込んだ。その瞬間、彼女の体が霧散する。

「・・・・・・・・何？」

手ごたえがまるでない。と、グサ、と背中から槍が突き刺さる音がした。

先ほどまでアテナの体をしていたものは、アルテミスの放った矢つまりは幻術だ。ゼウスは歯噛みをする、

「何が愚かなことなのでしょう？」

背中からかけられる声にゼウスが憤る。

「小娘がっ！」

パシツと払いのけたしぐさで電を平行に放ったが、アテナは跳躍しそれを避けた。

「お父様、ご主人様がどこへいるのか教えてくださいませんか？」

「ほざきやがって・・・・・・・・“雷神”！」

ひととき大きな雷がアテナの元へ落ちてくる。

アテナがよけようと足に力をこめたとき、ゼウスがアテナの足に矛を突き立てた。

「ぐ、あ…っ！」

身動きの取れなくなったアテナに、雷が直撃する。

「……………っあああっ！」

「アテナ！」

あせったような叫びをアルテミスがあげる。

ゼウスはにやりと笑いつつ、

「頼みの綱は消えたぞ？」

「……………、どれほどの仕打ちをすれば、気が済むのですか！」

ぴたり、とゼウスに向けられる弓。

「それほどまでに、その地位が大切ですか！」

「当たり前だろう、どれだけ過酷な戦いをして勝ち取ったと思っているのだ」

「そこにはアテナも混じっていたでしょう！あなたの地位はアテナの功績でもあるのですよ……………！」

「知っている。ご苦労だったな」

アルテミスは頭がおかしくなりそうだった。

怒りで、憎しみで、そして、嫌悪で。

他人をものとしか思っていないような振る舞い。

「あんたを見ていると寒気がしてくるわ……………！」

「よく言われるよ」

明らかに侮蔑のこもったアルテミスの言葉に、ゼウスは鼻で笑って返した。

「さて。遺言はそれだけか？」

ゼウスの手にはもう矛すらない。雷だけで殺せるのだと確信しているのだろう。

いや、殺す、という表現は不適切だ。

神はたとえその体を失ったとしても、魂を神界で休めさせ、たく

さんの時をかけて肉体を一から再生できる。

だからこそ、彼はアテナを“殺す”のではなく“封印”したのだから。

「あんたはあたしたちをどうする気なの？」

もう一応の敬語すら付けず、アルテミスはたずねる。

「もちろん、冥界に送って、罪を償ってもらう。反逆者よ」

「……………」

「ああ、あの人間の何か？ わかりきっているだろう。——殺す」

さらりと殺すといわれて、アルテミスはびくり、と震えた。

「あれは関係のない人間でしょ」

「反逆者に手を貸しただろう。それだけで十分だ」

ゼウスは手を上に突き出した。

「お話はおしまいだ、月の女神よ。せいぜいあがくがいい」

アルテミスのはるか頭上に雷が集まってくる。

全力で倒すというのは彼なりの神への敬意だろうが、そんなものは関係ない。

「だまれええっ！！！」

アルテミスも矢を放った。

しかしその渾身の矢さえも、ゼウスの

「下らん」

という一言で掻き消えた。

「そんな——」

そして、直後。

ドオオオオオオオオオン。

彼女に雷が、落ちてくる。

「あ、て……………な……………」

アルテミスの視界が、真っ白になって——、

* * *

第一章 戦いは女神とともに舞い降り、散る その9

* * *

そのころ。

浅葱は苦戦をしていた。

「ちつ多いなあ、くそっ」

剣を振りかざし、使い魔を倒していくが、一向に数が減らない。別に浅葱の力が足りないとかそんなことはなく、ただ単に“数が多い”。

むかつくので、雷神を召還させてもらおう。

「建御雷神！！！！！！！」

その言霊だけで、すさまじい勢いで雷が落ちてきた。それが直撃したものはともかく、その周囲にいたものまで余波で泣き倒され、消えていく。

「・・・・・・・・ふっ」

雷神を召還するのは疲れるのだ。しかもまだ使い魔のこつてるし。

「つたく、どれだけ用意してるんだよ・・・・・・・・」

その言葉に答えるものがいた。

それは、男の声。

「すごいな、この私と同等の雷を操れるのか。お前が崇めるその雷神は」

その言葉に、浅葱はいやそうな顔をしていいのける。

「・・・・・・・・崇めてなんかいいえよ」

これは浅葱の本心だ。

むしろ彼はこの神のことを憎んでいるのだから。

というか、今はそれよりも。

「お前、アテナとアルテミスはどうした！」

「ああ、あの小娘たちは私の手で葬ってやったよ。わりと簡単だったな」

くく、と思いきり見下した笑みでゼウスは答える。

「てっめええええええええええ！！！」

激情に身を任せ、地を蹴った。

浅葱が布都御魂剣を握り締め、ゼウスに切りかかる。
しかし。

「ぐ、うあ、あああ……！！！！！！」

背中に氣を失ってしまい、そのほどの衝撃が走る。

ばたりと倒れていく感覚がした。

「遅い。遅いぞ人間。これでは遊ぶ暇もなく殺してしまいそうだな」
矛を持ったゼウスを見て、浅葱は瞬時に何をされたか理解した。
矛の柄で殴られたのだ。

刃でもなく、雷でもなく、柄。

なめられている。

「ふざけんじゃねえ」

「なに？この期に立ち上がるか、人間よ」

立ち上がったものの、少しの衝撃で倒れてしまいそんな浅葱をみて、ゼウスは笑った。

ぎり、と刃を食いしばり、浅葱はゼウスをにらみつける。

「ふむ、その目、気に入らぬな」

そんなゼウスの言葉を聞き流し、浅葱は切りかかる。

しかし、またしても簡単に振り払われ、地面に落ちた。

「
／
々
・
・
・
・
・
・
」

「弱いなあ、人間よ。お前らは弱い。ちよつと力をいれれば――」
 そういつて、浅葱の首を持ち、目の前に無理やり立たせた。「――」
 すぐに、死んでしまふ」

「ぐ、か、あ………がっは、なせ………！」

窒息死をしそうな状態の癖に、それでも自分をにらみつけてくる

この人間にゼウスはすこし興味を覚えた。

「お前、なにゆえそこまでする？あの娘に懸想でもしているのか？」

「・・・・・・・・ち、げえ、よっ・・・・・・・・！ただ、・・・・・・・・ふく、しゅ・・・・・・・・うだっ・・・・・・・・！」

「ふく、しゅう・・・・・・・・だど？」

ぱつと手を首から離される。ドスン、としりもちをつき、ごほつごほつと咳き込みながら、浅葱はゼウスをにらみつけた。

「そっだよ、お前ら神なんか、だいっきらいだ・・・・・・・・！傲慢で、身勝手で、・・・・・・・・人間の命なんか、どうにも思ってなくて。だから、嫌いだ・・・・・・・・！」

ゼウスはその言葉を聴いて、少々驚いたようだが、しばし考え、にやり、とわらった。

いやな予感がした。

「そうか。では——死ぬがよい」

殺される。

そう思ったが、もうよけようとも思わなかった。
もし、これですべてを終わらせられるのならば。
もし、この辛さから逃げられるのならば。

(・・・・・・・・終わり、かな・・・・・・・・)

矛が下りてくる。

浅葱はそれを、静かな目で見つめていた。

頭に、姉の姿が映った気がした。

「・・・・・・・・お、ねえ・・・・・・・・」

「どきなさい！！！」

聞きなれた声でした。

どん、と突き飛ばされ、矛の軌道から外れる。

「・・・・・・・・え？」

呆然とする浅葱の前で、血が飛び散った。

「ぐ、あっ・・・・・・・・！！！」

自分をかばい、矛の攻撃を受けたのは。

「あて、な………?」

「ごめんね、少し再生に時間がかかった。遅くなっちゃった」
にっこりと笑うアテナに、ゼウスは冷たい声を浴びせる。

「まだ生きておったか」

「当たり前でしょう。この程度で死ぬるもんですか」

そういうアテナはところどころやけどをしていて、矛の攻撃をうけた肩からは血がどばどば流れていた。

しかし、もう自分には共闘する気力も、体力も残っていなかった。
アテナが来て、安心したせいだろう。

意識は混濁し、もう起きていることすらまならない。

「………すまないな」

ふらり、と倒れた浅葱に、懐かしくて憎い声が聞こえたのは、気のせいだろうか。

なぜ、剣が光っているのか。

なぜ、自分の前に昔ながらの服を着た男が現れたのか。
それを思考する前に。

「………あ——」

浅葱の意識は途切れた。

* * *

「あなた………!」

突然あらわれた袴を着た男に、アテナは驚きの声をあげる。

「建御雷神です、以後お見知りおきを」

丁寧な口調で応じた建御雷神に、ゼウスはほお、とうなずいた。

「なるほどな、お前か」

「我を知っているのですか？」

神気で布を顕現させ、その上に浅葱を寝かしつつ、建御雷神は驚いたように声を出した。

「小耳に挟んだだけだ。私と同じ、雷を操れるとな」

「まあ、雷神ですから」

につこりと笑う建御雷神に、ゼウスは冷たい目を向けた。

一応の確認だ。

「で、なにゆえ出てきたのだ？」

「ああ、この人間を殺すのでしょうか？」

「当たり前だろう」

「それは控えてほしいので、頼みに来ました」

その言葉に、アテナは驚きの目を向ける。

そんなアテナに建御雷神はにこりと笑って

「あなたも聞いたでしょう？我が何をしたのか」

アテナははつとして建御雷神をみる。

「あれは、今までがんばってきた彼女にいたわりの言葉を向けただけなのですが、少々誤解されてしまいましたね。一応彼女には二つの道を示したのですが——まあ、それでも罪悪感が消えなかったのですよ。というわけで、お助けに参上つかまつったわけです」

ゼウスは鼻で笑って、くだらぬな、と吐き捨てた。

「お前は、私が誰なのかわかっているのか？」

「“ギリシャ神話”のなかで、神々をすべるものでしょう？」

「……そのくくりは気に食わぬが、それでも、お前が私にかなわないのには変わりない」

そうですね、と建御雷神は肯定した。

「ですから、頼んでいるのです。このものを見逃してくれ、と」
「ふむ、なるほど。だが、かなえる義理などない」

ゼウスは不適に笑う。アテナはぐ、と唇をかみ締めた。

（——結局、私はなにもできないのね）
そのとき。

（大陸の女神よ）

頭に声が響いた。

え、と驚いたようにその声の主——建御雷神を見上げる。

（今、心の中に語りかけているのです。幸い目の前の傲慢な男神は気づいてないらしい。今がチャンスです、気づいてないフリをして力をためてください）

（・・・・・・わかったけど、どうして？）

（今から我がこの男神と戦います。彼は我を侮って雷しか使っていないでしょう。雷なら、突き破ることはできなくとも、相殺はできます。その間に突っ込んでください）

建御雷神は、ゼウスをにらみつけた。

多分故意なのだろうが、よくそんな度胸があるな、とアテナは場違いだが感心した。

「・・・・・・なんだその目は」

やはり簡単に挑発に乗りましたか、と建御雷神はほくそ笑む。

もともと、男神とは傲慢なものだ。

すべてを手中の収めていないと気に食わない、という輩が大量にいる。

挑発に乗るのは当然と見えた。

「いえ、ならば倒すしかないと思ひまして」

「はは、いつてくれるな！」

やはりというか、なんというか、雷が頭上に落ちてくる。単純だなあ、とあきれつつ、それを建御雷神は自身の手から生み出した雷で相殺する。

「・・・・・・忌々しい」

「そうですか？」

息もつく暇もないほど続けて落ちてくる雷を確実に相殺している建御雷神にアテナは感嘆した。その貴重な時間の間に、足と手に力を蓄える。

神気が彼女の足と手を巡り、仄かに青白く光った。

どれくらいまでためられるだろうか。あの雷神がゼウスの攻撃を

でもあの神々の王には及ばない。忌まわしいことに。

せめて、自分が完全な姿であつたなら。

あの男を、父であるあの憎むべき“強敵”を倒せたかもしれないのに。

そんな思考の沼にはまっていたアテナは、ぐう、といううめき声ではっと意識をこちらへ戻した。

「はは、その程度か！」

「だ、まって……く、ださいっ!!」

押されてきているのだろっ、建御雷神の体の節々に、火傷の痕の
ようなものがある。

（——大陸の女神よ、そろそろいけますか？情けないことに、これ以上は難しいです）

その言葉に、アテナはぎゅう、と槍を握り締めた。

(—うん、了解)

息を吸い、また吐く。自身の気持ちを落ち着かせ、最善の状態であの男に槍を突き刺す。持つのはあの男を突き刺す明確なイメージ。決してぶれない、絶対にためらわない、必殺の一撃。

(この一発で決めてやる！)

アテナはぱつと飛び出した。雷と雷が衝突してできる光のなかに上手にうもれてゼウスのところへ目指す。

その間にも、神気をめぐらせ力を蓄える。

あと一歩。

それで、間合いに入る。

そう確信したとき、ゼウスのほうもアテナに気づいたようだ。

[illegible]

!!!!!!

雄たけびを上げて、最大の雷を放とうとした。

（させるかっ！！！！）

溜め込んだ力を爆発させて、最速のスピードでアテナは突っ込んで

アテナは浅葱の元へ駆け寄り、治癒の魔術を唱えた。浅葱の体の回りから不思議な球体のような光が舞い踊り、まるでテープの逆再生のようにみるみる傷が修復していく。

はらはらと見守っているアテナの耳に、小さく喘ぐ声が聞こえた。

「……………ん、ぐっ」

「浅葱！」

よかった、とアテナはほっといきをついた。

「えーっと、あれ？なんだこの布……………」

ぎくり、とアテナは体を震わせた。特になんの約束もしたわけではないが、あの様子だときつとあの神は自分が浅葱を守ったなど知ってほしくないに違いない。だから言わないことにして、慌てて話題をずらした。

「あの、お父様——ゼウス様は倒したわ」

につこりと笑うアテナに浅葱は目を伏せた。

「アテナ……………俺、全然役に立てなくてごめん……………」

「

しゅんとうなだれる浅葱、アテナは

「そんなことない」

ときつぱりと告げた。

本当に、彼がいなければ建御雷神が顕現することもなく、自分たちは地獄へ閉じ込められていたのかも知れないのだから。

でもそんな事情を知らない浅葱は、ただ悔しがる。

「……………でも」

彼は思い知らされたのだ。

神と人間の圧倒的な力量の違い。

決してかなわぬ、追いつけぬほどの違い。

自分が全力でやってもかなわなかった。

それどころか、むしろは本気にさえ、なっていなかったのだから。

（……………まだまだだな）

そんな浅葱の心情をなんとなく理解できたアテナは、浅葱の手の

上に自分の手を重ねた。

「っ！?!?」

突然の行動に心拍数がおかしくなっている浅葱を見つめつつ、アテナは言った。

「じゃあ、強くなれば良い。今が弱いのなら、もっと、もっともと、強く」

まぶしいくらいの笑み。

浅葱はみとれていた。心の中ではアテナの言葉が渦巻き、魂に刻みつけようとしていた。

(・・・強く・・・)

そのとき。

「アテナっ！!!」

傷だらけのアルテミスがこちらへ駆け寄ってきた。

「アル！」

嬉しそうな声を上げて、ぱつと浅葱の手から手を離し、アルテミスに駆け寄る。

「もう、いなくなってたから心配したのよ!？」

「ごめんごめん。それより、再生は？」

「八割・・・ってとこかな。まだ傷は残るけど大丈夫」

そういうアルテミスの体はぼろぼろで、ところどころ服がやぶれているし、火傷や切り傷が多く、まったくもって万全とはいえない。今敵がきたらおしまいだろう。

浅葱はどうする、と聞いた。

「アルテミスの再生をまつか？それとも前へ進むか？」

「あたしなら大丈夫」と、アルテミス。

「アルテミスの再生を待つ」と、アテナ。

その言葉にぷちん、と両者がきれた。

「あのねえ!!!全然傷治ってないじゃない!!!こんな、こんな痛々しい姿でっ!!!女の子なのにつ!!!可愛いのにっ!!!台無しじゃない!!!」

「なによっ！でもゼウスが起き上がってくるかもしれないじゃない！悔しいけどあいつの力は馬鹿にならないからね！！だから絶対くのー！！」

浅葱はこのやりとりをぼけー、と眺めていた。確実に傍観者である。

「・・・・・・・・まったくもう」

「こっちのせりふだ」

とかなんとかいいつつ抱きしめあつて二人はいつたい何なのだ。恋人なのか。親友つてこんなものなのか。と浅葱は自問してみた。

「お二人さん？言い争うくらいなら先に進めば・・・・・・・・」

「おお、あたしたちの邪魔をするなら氷の串刺しにでもしてやろうか？」

にっこりとむしろそれが怖い度迫力の笑顔を向けられた浅葱はすぐすごと引き下がった。

世の中、女ほど怖いものはないのである。

* * *

第一章 戦いは女神とともに舞い降り、散る その10

* * *

再び歩き出した三人の前に立つ人影があった。

「敵、か．．．．．？」

「．．．．．ち、がう」

アテナはふるふると首を振った。その瞳には歓喜に満ち溢れていた。

人影が近づいてくる。

それは、美しい美しい、女性。

「アテナ」

凜とした声が、あたりを響かせる。

ぱつとアテナはかけた。そして、抱きしめる。

「母様！」

「アテナ、よく着ましたね。．．．．．それに、アルテミス。よく、決意してくれました」

「．．．．．いえ、いいんです。もう。あたしは」

さびしそくに笑うアルテミスに形のいい眉を下げてごめんなさいね、といった女性は次に浅葱にむかった。

「浅葱君．．．．．といったわね？」

「あ、はい、そうっすけど。なんで俺のことを．．．．．？」

アルテミスと同じように、なんか口調が変わってるのだが、やっぱり浅葱は気にしないことにした。

「ふふ。ここから見ていたの。ごめんなさいね、覗き見みたいになっちゃったかしら？」

「あ、いえ、大丈夫です……」

そう？とにつこり笑った姿はさすがになんと云うか、かわいい。美人なのにかわいいとは、どういうことだ。最強すぎるではないか。

「私の名はメティス、知恵の神です。この子、……アテナの母親です。よろしく願いしますね」

「あ、はい……」

ぺこ、とこちらも頭を下げておく。

「母様……あの、ご主人様のところへ連れて行ってくださいませんか」

ようやく落ち着いたのか、メティスから離れたアテナは、そう申し出た。

「連れて行くのは無理なのです。ごめんなさいね。でも、道だけなら示してあげられます」

そういつて、メティスはつい、と指を振るった。

その瞬間、細い、細い、だけど確実に続いている道が示された。

その道は、輝き、薄暗いここでもきちんと見える。

「ありがとうございます」

「いいの、あの子を救ってあげて……さようなら」

メティスはぎゅう、とアテナを抱きしめた。

メティスの言葉に少しひっかかりを覚えながらも浅葱は言った。

「じゃあ行こうか」

「……そうね」

「うん、行こう」

光の道筋をたどり、進んでいく。

しかし、一向にたどり着かない。

「アル、ご主人様がいらっしゃるって、こんなに深かったっけ？」

「たぶん、あそこは精神体で活動していたんだと思う。メティス様
が示されたのは、あの子の本体もある場所なんだわ」

「……異界の、最奥地……」

アテナはしばし考え込み、でも、進みましょう、といった。
そのとき。

世界の質が変わった気がした。

「っ！？これは……………」

「ご主人様の……………心の世界だわ……………」

「心の……………世界、だと……………」

浅葱があたりを見渡すと、そこは岩石が突き出していたり、嵐が吹き荒れていたりと、まともなものではない。

「なんか、すげえ荒れ狂ってるんだけど……………」

「……………しょうがないじゃない。何千年も閉じ込められてたんだから」

アテナの言葉に「なるほど」と浅葱はうなずいた、

「……………」

アルテミスはさびしそうに辺りを見渡す。

そんなアルテミスになにかをささやいたアテナは——叫んだ。

「出てきてください、ご主人様！！！！！」

その声は反響し当たりに響いたが、何も現れる気配がない。

「なんですか！！！！なんで、なんでそんなかたくなに拒むんですか！！！！」

進もうとしたアテナを嵐が押し返した。

「っ、きゃあっ！」

「アテナ！？」

アテナを支えたアルテミスは

「やつぱり、やめたほうが……………」

その言葉をアテナは押し返す。

「だめよ、今やらないでいつするの。ご主人様は怖がってるだけなの。あの人は、光の中にいるべき存在なのに。いつまでたっても闇の中に身を潜めて……………哀れだわ」

アテナは進む。嵐の中を。

「ご、しゅじん、さま……………出てきてください！出てきて、

お願い・・・・・・・・」

そのとき。

ゴオオオオオオオオオ、と嵐が吹き荒れ、浅葱たちを襲った。

「っ！？アテナ、アルテミス！」

「こ、こっちは大丈夫！」

「あたしもだ！」

突然の攻撃に狼狽する三人に、ひとつの白い塊が現れる。

（——出て行つて）

声帯を鳴らすのではなく直接頭へ響いてくる声。

その声の主は、真っ白い髪をしていて、瞳は透き通るように青く、しかしどこかにこつていて、十歳くらいの——

「あて、な・・・・・・・・？」

浅葱は呆然としてつぶやいた。

そつ、顔が、すこし幼くしたアテナと酷似していた。

「・・・・・・・・ご主人様」

（——ご主人様なんて呼ばないで。あなたは私、私もあなた。だから、馬鹿なことを考えないで出て行きなさい）

白い少女はきっぱりという。

その体からは光が絶えず生まれ出ていて、今にも消えそうなほど、弱く見えた。

「いやです」

それでもその白い少女に対してアテナは頑として言った。

「なんで！？なんでそこまでするんだっ！アテナっ・・・・・・・・！」

泣きながら訴えるアルテミスに、ごめんね、とだけアテナは返す。白い少女はそんな二人をさびしそうに見ていた。

（——アルは泣くわ。みんなを悲しませるだけ。あなたがいなくなつたら。その、浅葱という男の子だつて）

その言葉に、浅葱反応する。

「いなく、なる・・・・・・・・？」

浅葱は、いやな予感がした。

彼女は、二つに裂けた、といった。

助けるのだと。

それは、もしかして……

「お前、“ご主人様”と、また、融合するつもりなのか……」

「ツツツ……元に、戻るだけ」

アテナは適当にはぐらかそうとしたが、それを、“声”は許さない。

（——あなたという“人格”はなくなってしまうのに。あなたはいなくなってしまうのに。それでも、やるの？私はいやよ。だって、誰も、悲しんでほしくないもの……）

「……その、やさしさが……」

（——え？）

「その、やさしさが、大好きです……」

につこり笑って、アテナは白い少女をみた。

「だから、元に戻りましょう。あなたは私、私はあなた。なら、それが筋というものでしょう？」

「……」

浅葱は、現実感がもてなかった。

彼女が消えるということが、どこか、信じられなくて。

そして、アルテミスは。

「……うう、うあ……」

「アル……」

アテナはぎゅう、と抱きしめた。

「……やだ、行かないで。いかないでよ。やだ、やだやだやだやだ」

「いつまでも子供みたいなこといつてちゃだめ。もとに、戻るだけなのよ？あなたと出会ったばかりのころに」

「……あたしは、あっちのアテナも、あんだというアテナも、両方好き……どうして、元に戻るうなんていうのよ……」

「……」

泣きじゃくるアルテミスに、声も同意する。

「——私もこのままでいいのよ、だから——」

「わかってるんでしょう！！！！！」

アテナが激昂した。

「——……」

「このままいくと、あなたが消滅するって！」

「………、え？」

アルテミスがぼかん、とアテナをみる。

「二つに裂けた上、お父様の異界の中でかなりの神気のダメージを食らったあなたは、消滅してしまう………！」

「あ、あう、あて、な………？」

やっと状況を把握したアルテミスがぺたん、と床に崩れ落ちた。

彼女は悟った。

いま、このままでは白い少女が消え。

それを許せないアテナは融合し、自らを消す。

「は、はは………」

つまり、どこにも救いはないのだ。

どちらをとつても、どちらかが消滅する。

なんて理不尽な世界なんだろう、とアルテミスはもう立つ気力もなかった。

アテナを守りたい白い少女は拒む。自身の消滅を受け入れている。

「——それで、いいわ」

それを許せないアテナは必死に融合しようとする。

「だめです！だめ、です………アルの要望をかなえるには、私たちが戻ることが一番いい」

でも、二人の間にある、二人を突き動かしている、共通の想い。

「………私の、要望………」

それは。

「………私もご主人様も生きてること。それが、あなたの一番

望むことでしょうか？」

「……………で、でも、あたしはそんな意味で言ったんじゃない……」

「じゃあ、ご主人様が死んでもいいのね？」

あまりの酷な質問に、うつとアルテミスはうなった。

それに、わかってしまったから。

この少女は、自分の望みを最大限努力して、かなえようとした結果こうなったのだと。

「アテナ……………」

「ばいばい、アル。大好きでした。これから、これまでも」

「……………あたし、も、大好き……………」

きびすを返し、去っていく親友に、もう、ただ、これだけが精一杯だった。

アテナは浅葱に言う。

「浅葱、ごめんね。いきなり巻きこんだかとおもえば、こんな結果で……………」

「……………お前は、いいのか？」

「……………もちろん」

につこり、精一杯の笑顔は、ぼろぼろで。

「……………浅葱、私、さ……………」

「……………なんだ？」

「浅葱に、惚れちゃったかもしれない」

「……………え、ええ、え、は、ア……………？」

突然の告白にとまどう浅葱にふふ、と笑って

「見ず知らずの私にご飯くれて、助けてくれて。これで惚れない女なんか、いないわよ」

「……………お、俺は」

「ああ、返事はいらないわ。未練が残りそうなもの」
そういつて、ばいばい、といった。

二回目の“ばいばい”は、一回目以上につらかった。

「俺も、お前が、好きだ!!」

「な——」

吃驚したアテナが振り返る。それを、浅葱は抱きしめた。

「なんでかはわかんねえけど、でも、それでも、好きだ。だから、行くな……!」

抱きしめられるがままになっていたアテナは、それでも、とつぶやいた。

「それでも、私は行くんだよ」

ああ、これがアテナだ、と浅葱は納得してしまった。
納得せざるを得ない、彼女の強くて脆い部分。

「……じゃあ、ほんとに、ばいばい、だな」

「……うん」

歩き出したアテナを止めるものはもういない。

「やりましょう、ご主人様」

歩み寄るアテナに、白い少女は泣きながらうなずいた。

(……わか、った)

「もう、みんなして泣かないくださいよ。私は元の居場所へ戻るだけなんですから」

一番“泣く理由”をわかっているアテナは、それでも泣かれることを拒んだ。

みんなには、笑っていてほしいから。

身勝手だけど、でも、本当に。

「ご主人様、融合の同意を」

「……同意、する……」

にこり、と笑ったアテナに、少女のアテナは悲しげに目を伏せる。
二人の周りに、光が飛び散る。

それは、弧を描き、二人の間を取り囲んだ。

「——融合——」

二人の声が重なり、光が空にまで貫く。

そして。

「融合、かんりょう」

「あ、てな．．．．アテナあああああああああああああああ
あああ！！！！！」

泣き崩れるアルテミスの元へ、足して割る二でなったような容姿——つまり十四歳程度の姿になったアテナが駆け寄っていく。

「ごめんね、ごめんね、アル……ごめんね……」

「あんな、だけは。」

ぎゆう、とアテナを抱きしめて、アルテミスは誓った。

「あんた、だけは………
“絶対”、守って、見せるんだから………」

それは、初めて会ったときと同じ誓い。

重みが違った。

「 うん 」

そして。

「
・
・
・
・
・
・
浅葱」

アテナは言う。そこ言葉に、浅葱は顔をしかめた。

「なあ、俺、どうすれば良いのかなあ……」

頭をぐしゃぐしゃしながら、浅葱は座り込んだ。

もう、何もかも限界で。

どうすれば良いのか、わからなかったから。

「お前は、
“ アテナ ”
なのか？それとも、
“ 白い少女 ”
なのか？」

「……どっちでもないし、どちらとも、といえる」

今のアテナの心には、浅葱を好く気持ちも確かに存在しているし、始めてあった少年”としても認識されているのだ。

「……でも、私の中にあなたに“好意”を向ける自分がいる。それはきつと彼女の心。——だから、私はあなたを好きにな

る。たとえばあなたが私を見てくれないとしても、私の中にある“あの子”を見てくれれば良い」

それは、やさしくてやさしくて、でもどこまでも残酷な宣言だった。

自分として見られないのが、どれだけつらいのだろう、と浅葱は思う。

でも、浅葱には、ぐだぐだになってしまった浅葱には、それしかなかったから。

彼はそれを受け入れた。

「……俺、はお前の中にいる“アテナ”だけに、好意を向ける。……ごめんな」

こうして。

一人の少女は救われた。

どこまでも救いのない、やり方によって。

第二章 幼馴染と浅葱の家系

* * *

「・・・で？・・・どーゆーこと・・・なのかな・・・」

ビシビシと視線が痛い。

浅葱はさらに身を縮こませた。

「・・・どうして、そんな・・・小さい子と・・・一緒に・・・住んでるの、かな」

にこにこ笑顔を浮かべ、しかしそれはとてつもなく恐ろしい。怒っている。

間違はなく、怒っている。

「事情、説明・・・できるよね・・・？」

「・・・えと、それはだな、色々あって・・・」

「通報」

容赦なく携帯電話と取り出された。これだから現代っ子は侮れない。

浅葱は慌てて弁解した。

「待て！お前は色々誤解している！」

「何が・・・かな？異性不順交友・・・？・・・監禁？ロリコン幼女好き・・・？」

首を傾げた反動で、彼女の薄い髪が揺れた。

赤い目が、怒りで蘭々と光っている。

「つていうか、なんで私まで？」

「お前も原因の一つだからな！？」

浅葱はたまらず突っ込んだ。

といよりアテナがいるからこんな羽目になっているのである。

ことは、数日前に遡る。

* * *

あのあと。

異界から浅葱の部屋へ戻ってきた”三人”は、脱力したように沈黙したままぺたりと座り込んでいた。

日が暮れ、夜になると、まずアルテミスが立ち上がった。

「…アル…」

アテナが声をかけた。

アルテミスは寂しそうに彼女に笑いかけ、それからパンパンとお尻を払った。

「ごめん、行くね。少し旅してくる」

アルテミスはなにかの魔術を呟いた。

彼女の姿が薄く消える。あとからきけば転移の魔術だったらしい。

そして、彼女は消える瞬間に浅葱に笑いかけた。

「ありがとう。いろいろと」

「…？」

そして、アルテミスは消え、あとには二人が残った。

気まずい沈黙。

それを破ったのは、浅葱だった。

「…お前、行くところあるの？」

「…ない、けど…。大丈夫。ほとぼりが冷めるまでどこか放浪してる」

アテナは神界には戻れない。

あんなにゼウスを怒らせたのだから、しょうがないといえましょうがないが。

「…そ、つか…」

このまま別れてしまうのか。

たしかにこのアテナは”アテナ”ではない。
だからといって、見捨てることなんて。

「出来るわけ、ねえんだよねあ…」

「…？」

浅葱は一瞬歯をくいしばったあと、アテナに向かっていった。

「じゃあ、ここに入ればいいんじゃないか？」

「…え？」

できるだけ、普通の調子で。

彼女には何も気負わせないよう、普通に。

「…いいの…？」

アテナの声は震えていた。

信じられない、というように。

「当たり前だろ。行くとこねえんだったら」

「…また、戦いに巻き込まれるかもしれないのに…」

「俺が強くなればいいって話だ」

俺が笑うと、アテナは半泣きで、それでも笑い返した。

そういうわけで、二人ですごすことになったのだが。

今朝。

ピーンポーン、と呼出音になった。

誰だろうか、新聞か？

と重い、ガチャ、と開けたら。

「…お、おお…」

幼馴染がいた。

「お久しぶり…あさぎ…」

「…お久しぶり、だな」

吃驚した。

アポなしでいきなり来たのだから当然だが。

「中学2年生のときにあったのが最後…だよな？」

彼女先天性色素欠乏症特有の赤い目で浅葱を見上げた。^{アルビノ}

彼女の名前は昴流。^{スバル}浅葱と同じ年で、浅葱の母の妹の娘、つまりは従姉妹だ。

ついでに、父が外国人なのでハーフで、その関係でシスターだったりする。

「そうだな……。今日はどうした？」

「あ……。本家から」

がさごそ、と彼女は鞆から手紙を取り出し浅葱に渡した。

「馬鹿なこと考えてないで帰ってこい、っておばあ様が。それから、加奈さんは、たまには帰ってきなさいって。それで、幸人さんは自分の好きなようにやれ、瑠奈ちゃんは早く帰ってきてくださいお兄ちゃん。……。って」

「お前、よくそれだけ覚えられたな……」

浅葱は関心半分呆れ半分で呟いた。

加奈は浅葱の母で、幸人は浅葱の父だ。瑠奈は妹である。

「とにかく……。いい加減、帰らないの……。？」

「……。帰れない理由、わかってるだろ？」

昴流の問いに、浅葱は質問で返した。

昴流は押し黙った。

「……。用はそれだけなのか？それだけだったら電話で伝えてくれても……」

浅葱の実家やその近くに住む昴流の家からは、この浅葱のアパートはふらりとくるには遠すぎる。

昴流はぶんぶん、と首を振った。

「えとね、お弁当……。作ってきたの……。それから、これからのことも、少し……。お話、しないと……」

これからのこと？

疑問に思ったが今は聞かないことにした。

「じゃあ、あがるか。お弁当楽しみだし――」

そこで、はた、と気づいた。

今、中でアテナが未だにすやすや寝ているはずだ。

「？あさぎ、早く入る・・・？」

さすがにまずい。

アテナが昴流に見つかれば、めんどくさいことになりそ――

「浅葱？どうしたの？」

寝ぼけナマコのアテナが浅葱がいないことに気づいたのだろう。
てくてくと、こちらへ向かってきていた。

「……っっっ！？」

その瞬間、ピシリ、といやな感じが後ろからした。

ゴゴゴゴゴゴ、とそんな効果音まで聞こえてきそうだ。

「……えーっと、昴流・・・？」

「浅葱？あれ？お客さん？」

アテナがぱちくり目を開けると昴流が声をあげるのはほぼ同時だった。

「どういうことなの――っっ！！！！！！」

* * *

「……で、今に至る、と」

「何か言ったかな・・・？あさぎ」

いえいえ何も言っていないですと浅葱は首を必死に横に振った。
昴流はふーと溜息を付いた。

そして、もういいよ正座、と許してくれた。

ありがたく正座をとき、アテナと浅葱は息をはいた。

「うっー、足しびれたー」

アテナは涙目で足をさすっている。

昴流はもう一度溜息をついて、持ってきた重箱をテーブルに置く。

同時に、おおー！と二人は歓声を挙げた。

「美味しそうっ！！食べたい！！」

「うわすげえうまそう！！」

そんな二人に昴流の顔は少しかだけ綻んだ。

「食べて・・・いいよ」

「もちろん頂きますッ!!」

「うわああ美味しそうッ!」

二人は夢中で食べた。

これまた凄く美味しいのである。見た目もいいし。

もう3年は一人で自炊をしてきた浅葱の舌でさえ美味しいと感じる。

「・・・ところで、あさぎ・・・これだけは聞いておきたいんだけど・・・」

「なんだ?」

昴流は言いづらそうにちらちらとアテナをみた。

「・・・あの子、人間じゃ・・・ない・・・よね?」

「うっ」

昴流にもやはり靈感はある。

ゴーストザッパー
”悪霊退治”である浅葱とは違い、彼女は”エクソシスト悪魔退治”なのだが、それでもやはりわかるらしかった。

というより、宗教的には彼女の方が位置的には近いのかもしれないかった。

「霊でもなければ悪魔でもないし...というより、それよりもかなり高次元な存在のような・・・」

「私は神様だよ」

会話が聞こえていたらしいアテナが会話に割り込んできた。

なんてことないように言う彼女に、昴流はポカンと口を開けた。

「神様?」

「そ。ギリシャ神話系のね」

「へえ・・・そうなんだ・・・じゃなかったそうなんですか・・・」

「あ、別に敬語じゃなくていいよ。そんなに気張らなくてもいいし。私はオリュンポス12神の戦いと知恵の神アテナ。よろしくね」

「あ、えっと・・・私は・・・エクソシストの、昴流って言うの・・・」

・こちらこそ、よろしく・・・」

やっぱり違う宗教でもすんなり受け入れられるのはうちの家系の賜物だよなあ、と浅葱はのんびり思った。

浅葱自身は陰陽師の括りに入るが、父は神父だ。母の家系は凄く大きな鹿島神社の巫女という女人族だが、だからといって全員巫女になるわけではない。母が跡取りで巫女にならざるを得なかったが、母の妹で昴流の母はシスターだし、そのさらに妹の千夏は画家で世界中を旅している。現当主である祖母の夫も外国人で神父だったというし。

つまり、浅葱の家系はいろんな宗教が混ざり合っているのである。数分後、食べ終わって満腹になったらしいアテナはごろーんと寝転がって満足気だった。こういうところは幼いなあと思う。

「そっぴゃ、なんで来たんだ？」

「・・・うん・・・」

昴流は今度は真面目な顔をして、それから浅葱の前に正座し、頭を下げた。

それは、格下のものが格上に対する態度。

幼馴染の間では、絶対にならないはずの、格好。

浅葱は昔のことを思い出して嫌になったが、これが形式なのだからしょうがない。

「次期当主様に、ご報告が」

「・・・なんだ？」

「妹君である瑠奈様が、正式に次期巫女へと決まりました」

じくり、と胸がいたんだ。

「瑠奈は、なんて」

「これからもご指導ご鞭撻をお願い申し上げます、自分の精一杯使命を果たします、と」

そっぴゃことじゃない。

そっぴゃことじゃないのだ。

それを言いたかったが、浅葱は黙った。

「・・・それで」

「あとは、この近辺に悪霊が発生したと。なので、私と一緒にそれを滅してこいとこの命令です」

「・・・わかった」

そこで、昴流は体を崩した。

「・・・終わり・・・」

「悪かったな、いつも、そんな堅苦しいことさせて」

「・・・しょうがないよ・・・いずれは、あさが鹿島家を統一する、偉い人なんだから」

鹿島家。

勢力を誇るのは、オカルトこちら方面だけではない。

政治、芸術、そして闇の方面。

浅葱の親戚には政治家や画家、そして”暗殺者”などが沢山いる。それが、いつか自分の部下になる。

浅葱にとって、それは恐怖に近いことだった。

「あんな家、潰れてしまえばいいのに・・・」

浅葱の呟きに、昴流は微笑んだ。

「本当に・・・ね・・・」

* * *

第二章 幼馴染と浅葱の家系（後書き）

第二章の始まりです！

浅葱、実はとてつもなくすごい人だったり？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5348x/>

かみ×かみ！

2011年11月6日15時44分発行